
IS～インフィニット・ストラトス～ 空を駆ける天の不死鳥

紅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス） 空を駆ける天の不死鳥

【Nコード】

N5284S

【作者名】

紅雷

【あらすじ】

極めて近く、限りなく遠い世界で少女は戦い続けた。本来ならば、その世界には存在しないはずなのにもかかわらず。仲間のために、世界のために、己を変えてまで不死鳥を駆って戦い続けた。これは、そんな少女が紡ぐ新たな物語。

——そして少女は 歪んだ世界 を破壊する。

ブローグゝ不死鳥は勇者のために散るゝ（前書き）

この作品は作者の気まぐれな発想で出来ています。

というか、グラハムと千の雨の方はどうしたんだよ、おい。

では、どうぞ。

プロローグ 不死鳥は勇者のために散る

—— 始めはわけがわからなかった。

自分は女の子であるにもかかわらず、ガンダムが大好きなただのオタクの少女だったのに。気づいたら、ゲームの中にいた。

・・・いや、正しくはゲームによく似た世界にいた。

夢だと思って、ほったをつねつてみたがただ痛かった。それはつまり紛れもない現実だということを意味していた。

—— そして、少女は溜め息をつきつつ眼鏡を外して 思考を切り替えた。

—— 少女は二重人格者である。

普段は眼鏡かけている彼女は大人しく優しいので、誰からも好かれていた。だが、眼鏡を外せば彼女は途端に恐ろしく冷徹な女へと変化を遂げる。

つまり、少女は人格的に思考を切り替えたのだ。

終わりの見えない世界で、どう生きていくのか。元の世界に戻るためにどうすればいいのか。それを考えるために。

——結論として、少女は戦いに身を投じていく。

ジェネレーション・システム中枢部。

世界が欺かれた全ての元凶である場所に、四隻の戦艦が向かっていた。彼らは地球圏統一連合軍独立行動部隊>フェニックス<、指揮官である少女——イチカ・オリムラ中将が長き戦いの中で集め続けた仲間達が所属する部隊である。

——少女がかつて持っていた美しい黒髪は所々白く変色していた。MS隊の副指揮官を務めるアムロ・レイよりも強力なニュータイプとして覚醒したイチカは、戦い続けたことの代償としてそうなってしまったのだ。本人はあまり気にしていないのだが、アムロとしてはこうなる前にジェネレーション・システムに気づけば良かったと気にしていたりする。ちなみにヒロやキラ、刹那などもだ。

イチカは思う——元の世界にいたった一人の肉親である兄のことを。

彼女がまだ幼い頃、両親は事故死した。彼女の兄は妹のためにただひたすらに働き続けた。遺産は勿論あったが、いつまでもそれに頼っていればじきに尽きる。兄はそう思ったのだらう、勉強の合間をぬってバイトに明け暮れ、いつもイチカのことを第一に考えて行動していた。

イチカはそんな兄を見て、中学の成績を上げ続け親孝行ならぬ兄孝行をすることにした。……もつとも、それはこの世界に来てしまったせいで叶わなくなってしまったが。

ハルファスガンダムを駆るアプロディアと共にミネルバは進む。僚艦であるプトレマイオス2、ネエル・アーガマ改、ソレイユは残存する敵機掃討のため待機することになった。……いや、正直言うのなら、全艦突入するのは無理と判断され足が速く、搭載できる機体が多く、火力のある戦艦で行こうとブリーディングで決まったからだったりする。

先行するハルファスガンダムを追いかけるように、女神とガンダムを駆る者達は進む。

そして、イチカは見てしまう。

ハルファスガンダムが……アプロディアがくじゃくのように

なガンダムを砲撃を受けて大破するところを。

「なっ!? ハルファスガンダムが……! !」

「何だあのガンダムは!？」

「たつた一撃でハルファスガンダムがやられただど!？」

僚機のガンダムパイロット達が驚愕の声を漏らす。それもそのはず、手強かったハルファスガンダムがあっさりとやられてしまったのだ。だが、驚くのはまだ早かった。

自分達のガンダムのコピー機までもが出現したのだ。

「ふざけるな……アプロディアをやっただけでなく、私達のガンダムを真似るだろ!?」

ふざけるなという言葉が繰り返し呟かれる。

彼女は認めない、自分達を導いてくれたアプロディアをやった存在がガンダムを名乗るなどと。そして、自分達のガンダムを操るなどと。故に……。咆哮した。

「フエニックス!! お前もガンダムなんだろう!? 頼む、私に・ ・ ・ 私達に力をくれええええええええええええええええええ! !! ! !」

アプロディアが願った世界の未来を創るために、奴を……。バルバトスを倒す力が欲しい。そう願ったのは、イチカだけではなかった。

アムロがカミーユがジウドーがシローがユウがシーブックがクリスがコウがウツソがガロードがヒイロがドモンがバナージがロランがキラがシンが刹那が願った。

すると突然、大破していたハルファスガンダムが発光しつつ浮かび上がる。それだけではない、イチカのフェニックスまでもが発光し始めた。

『これは一体！？』

『み、見るよ！！イチカさんのフェニックスが！！』

ガロードが声を上げると同時に、次々にハルファスガンダムのパーツがフェニックスと融合していく。

『進化しているのか……。？』

『確かにフェニックスは進化することができるけど！！』

それはあくまで、フェニックス・ゼロからフェニックスへ、そして能力を解放したときのみだ。パーツを自分から組み込んで融合し進化するなんてあり得ない。だが、それは現実起こっていた。

機体のカラーリングはフェニックスのものだが、関節などは金色に発光している。問題は外見だ、その姿はハルファスのものと酷似し

ていた。

「……これは、フェニックスなのか？」

「いいえ、この機体はハルファスとフェニックスが生み出した新たなガンダムです。」

機体のモニターに映し出されたのは、アプロディア。どうやら、消えかかっていたところで融合させたために復活できたようだ。

「新しいガンダム………?」

「はい、そして名前はまだありません。なぜなら、この機体はあなた方の思いの力によって生み出されたジェネレーション・システムすら知らないガンダムだからです。」

「俺達が生み出したガンダム？」

アプロディアは告げる、私に新しい名前をつけるように。……
・ 思えば、ハルファスという名前は確か悪魔の名前だったはず。不死鳥でありながらその名前を持つのは良くないと思う。ならば……
・ ……この世界を、天を駆ける不死鳥の名をつけよう。

「行くぞ!! ヘブンスフェニックス !! 私達のガンダムと共に
!!」

新たにヘブンスフェニックスと名付けられたガンダムはバルバトスに向かう。対するバルバトスはピーコック・フォームになり執拗に

狙ってくる。

「来るっ!!!!そこお!!!!」

イチカも負けてはいない、巧みに攻撃を回避しつつビームライフルでバルバトスの羽根を一枚一枚破壊していく。

ふと、周りを見るとコピー機相手にめげずに戦う仲間達がいた。傷つきながらもただひたすらに戦う姿は勇者のように見えた。

ビームサーベルをブーメランのように投げ、バルバトスの左腕を切り取ると、続けざまにサーベルを掴み右腕も切り裂く。

「これで!!!!」

両腕を失ったバルバトスへ向けて、ヘブンスフェニックスは変形して突撃する。ファイア、フレアを経てその翼は金色に輝いていた。

「コード・バーニング・ノヴァ、フルドライヴ!!!!」

ガンダムへの愛を込めて、その翼は駆ける。

そして、バルバトスをX字に切り裂き通りすぎた。

——途端、ジェネレーション・システムが揺れる。

『これは!?!』

『くっ、奴を倒したことで崩壊が始まったか!!!』

『急いで、脱出しないと!!!』

各機が脱出口を目指し始めるが……イチカだけが遅れていた。

『何をやっているんだイチカ!!早くしないと!!!』

「わかっている!だが、このままでは皆爆発に巻き込まれる!」

そう、各機無傷ではないため出力に問題が発生する恐れがあった。それを踏まえて計算した結果、このままでは確実に爆発に巻き込まれてしまう。だから、彼女は……イチカは機体を翻して決意した。

『何をするつもりだ、イチカさん！？』

「皆の機体の出力をヘブンスフェニックスの力を使って上げる！！」

『でも、そんなことしたらイチカさんが！！』

カミーユとウツソが止めようとするも、彼女の決意は変わらない。

「これしか皆が助かる方法がないんだ！！・・・だから、迷わず行くんだ！！」

『けど・・・！！』

『任務・・・了解！！』

『各機、脱出を優先しろ！！』

ヒイロとアムロが皆を誘導し始める。

『ヒイロ！？アムロさんまで！！』

『ガロード・・・イチカは俺達に未来を託したんだ。その為にも俺達は生きなければならん！！』

ドモンがガロードへの涙を流して諭す。彼だって、彼女を犠牲にするなんて嫌なのだ。でも、彼女は望み続けた。新しい世界の未来を・

『生きて未来を切り開け・・・そういう事が、イチカ？』

「ああ、刹那。わかっているようだな。」

爆発の波が迫る。

イチカは最後に戦友達へ向け、通信を繋ぐ。

「・・・今まで、帰る場所を守ってくれたことを皆に感謝する。この世界は君たちに託された・・・なんて、固いことは今さら言えないな。」

『・・・・・・・・・・。』

「せいぜい、後は頼んだぐらいがちょうどいいか。」

『くつ、オリムラ中将に総員敬礼！！！！』

皆涙ぐみながら敬礼していた。イチカはニコリと微笑んでこう返した。

「誰かを守って死ねるなら・・・本望だ。」

そう言って、通信は完全に途切れた。

「千冬兄さん……今度こそ、さようならだね。」

コックピットの中で、イチカ・オリムラ——織斑一夏という少女は瞳を閉じてそう呟き、光に包まれた。

プロローグ～不死鳥は勇者のために散る～（後書き）

次回はテンプレ転移。

ああ、眠い。

再臨の鐘（前書き）

マンガを小説にするより遥かに楽だからすらすら書けるのだろうか？

では、どうぞ。

再臨の鐘

IS——正式名称>インフィニット・ストラトス<。

宇宙空間での活動のために開発されたマルチフォーム・スーツであり、現段階では宇宙進出ではなく兵器として運用されている。もっとも、かつての大戦を繰り返し返すようなことがあつてはならないため、『スポーツ』という形で落ち着いている。

だが、このパワードスーツにはある欠点が存在していた。

女性にしか扱うことが出来ないのだ。

この欠点により、世界は男女平等から男尊女卑ならぬ女尊男卑の時代へ移り変わる事になった。

しかも、開発者は467機を製造後に突然姿を眩ませ現在もなお行方不明であるため、各国は振り分けられたコアを用いて開発していかなければならない。

そして、2月下旬に見つかった唯一の男性IS操縦者の登場によって、世界は新たな混沌の中を進んでいくことになる。

—— 3月上旬。

世界で唯一の男性IS操縦者の発見により、世界が揺れ動く中行われたIS学園の卒業式を終えた織斑千冬は同僚である山田真耶と4月に行われる入学式の準備をしていた。

「うう……今年は大変になりそうです。」

「やれやれ、弟がこんな事をしでかしてしまったせいで一気に仕事が増えてしまったな。」

涙目になりながら書類を処理していく真耶をさりげなくフォローしていた千冬はテキパキと仕事を終わらせていく。

「これ以上何も問題がなければいいんですが………はあ」

「そう溜め息をつくな、山田君。」

コーヒーをそつと差し出すと、千冬は窓の方へと移動し暗くなった夜空を眺める。本当に何も起こらないで欲しいと千冬自身もそう願っているのだが、世界はそんな簡単にはいかないだろう。確実に弟の織斑一夏は何かしらのトラブルに巻き込まれると千冬は予測していた。

——そんな時にそれは起こった。

『第一アリーナに高エネルギー反応有り！！繰り返す、第一アリーナに高エネルギー反応有り！！当直教員は至急対応されたし！！・・・』

「高エネルギー反応！？侵入者ではなくて！？」

「とにかく、行ってみよう山田君！！」

職員室から二人は急いで駆け出す。生徒がいないため、廊下がやけに静かに感じた。

「！！・・・・・・織斑先生！！」

「更識か、何故ここに？」

「ここで訓練中だったので、居合わせました。」

「それで更識さん何が起きているんですか！？」

「映像を観ればわかりますよ？」

管制室のモニターに外の映像が映し出される。そこには・・・・・・巨大な球体が光の波を放っていた。

「これは………!？」

「下手に近づかない方がいいと思ひまして、離れてしまいよくわかりませんが………先程から発光が強くなっていますので何かが起きるかもしれません。」

「そうか………!？」

更識の言葉に納得しかけた時、突如としてアリーナが強烈な光によつて見えなくなる。監視していたモニターが真っ白になってしまい、状況を把握することができない。

だが、それは一瞬の事だったのですぐにおさまった。……しかし、彼女達は次の瞬間、信じられないものを見る。

「何あれ………？」

「ロボット………？」

そう、アリーナの中央にそれは立っていた。

それはV字のようなアンテナを頭部に持ち、白と赤と金のトリコロルが特徴的だった。動く気配もなかったただ佇んでいた。

「ISじゃないですよね………？」

「………私にそれを聞くな、更識。山田君、ISで武装し接近する。行くぞ!!」

「あ、はい!!」

管制室から千冬と真耶が飛び出し、謎のロボットの元へと向かう。
・・・この時、彼女達は運命の出会いをするとはまだ思っていなかった。

「大きい・・・ですね。」

「・・・ああ、近くで見ると余計にな。」

警戒しつつ、周辺からロボットを見回す二人はその大きさに心奪われていた。すると、大体の構造把握が終わったことをISが伝える。
・・・そこには、内部に人が乗っているという情報があった。

「生体反応!?!どこにいるんですか!?!」

「山田君、ここだ!!」

千冬が指差した先は腹部。二人は協力して開閉スイッチがないか調べると、

「ん・・・?これか?」

左端にレバーを見つけるとそれを一気に引き下げる。すると、カシユという音と共に前方が開かれた。急いで千冬と真耶は覗き込む。

無論、武装したまま。

そこにはカーレーサーのような服装の人間がいた。体つきからして女性だろうが、一向に動く気配がない。恐らく、気絶しているのだらう。

「とりあえず、運び出しましょう。」

「ああ。」

千冬はパイロットを抱き抱えたまま、地上へと降下する。そして、ゆっくりと地面にパイロットを横に寝かせた。

「・・・まずは顔を確認するか。」

コックピットと同じように手探りでスイッチを見つけるとヘルメットの圧縮が緩む。なるべく静かに取り外すと黒髪に白いメッシュが入った少女の顔が現れる。

「なっ・・・、この顔は!!」

「え、この顔って確か・・・・・・・・・・」

現在、世界的に有名な少年、織斑一夏にその顔は似ていた。そして、どこことなく千冬自身にも。

「これは・・・一体何の冗談なんだ？」

千冬の弦きは静かに風に消えた。

再臨の鐘（後書き）

次回、主人公が目覚めまーす。

いろいろカオス!!

目覚めた世界（前書き）

ねむいぞおおおおおおおお！！

目覚めた世界

——ここは何処だ？

少女は重たい瞼をゆっくりと開く。

同時に手の感覚を少しずつ確認していく。

——自分は生きているのか？

そんな疑問の答えを得るために、少女は完全に目覚める。

「知らない天井だな・・・・・・・・。」

本当に知らない天井だった。

自身が知りうる基地施設の部屋ではないとすぐに理解した、そして周囲を見渡す。

「まるで、ホテルの一室だな・・・・・・・・。」

ベットから起き上がり、自身の状態をちゃんと確認する。

少女は爆発を受けたのだから、何かしら外傷はあるだろうと予想していた。だがどうだろう、事実上全くの無傷だった（……………）。

「あの爆発を受けて全くの無傷だと？そんな馬鹿な……………」

驚いていたのも束の間、ふいに部屋のドアが開かれ黒服の女性と童顔の女性が入って来た。念のため、イチ力は警戒の目で二人を見つめる。

「目が覚めたようだな？すぐに聴くのは失礼かもしれないが話がある。」

「……………その前にここは何処だか教えてくれないか？監禁部屋にしては些か豪華すぎると思っていたのでな。」

「……………ここはIS学園の空き部屋だ。」

「……………IS学園？」

聞いた事のない学園だった。

聞けば、インフィニット・ストラトスなるパワードスーツの操縦者などを育成する学術機関らしい。詳しい歴史背景を聴きつつ、イチ力は別の事を考えていた。

「（MSが存在していないか・・・それにこの女性、何処か兄に似ているな。）」

「・・・・・・・・それで、お前は何者だ？」

現状把握を優先したため、自己紹介がお互いまだだった事に気づいた千冬はイチカに問う。

「自分は『地球圏統一連合軍独立行動部隊>フェニックス<所属指揮官』、イチカ・オリムラ中将だ。」

「・・・・・・・・な!？」

「・・・・・・・・え!？」

イチカの名前が出た途端、二人は驚愕の言葉を口にした。なぜなら、少女の口から出た名前は現在進行形で有名な名であったからだ。

「・・・・・・・・その名前、偽名ではないんだな？」

「この状況で嘘をつくと思うか？ちなみに漢字で書くと『織斑一夏』だ。」

「そうか・・・・・・・・。私はIS学園で教師をしている、織斑千冬だ。」

「や、山田真耶です!-!」

「織斑千冬？……成る程、そういう事か。」

『織斑一夏』は理解した、ここが>元の世界の人間の性別が反対の、ISが存在するパラレルワールド<だということに。

「一人で納得するな、こちらに説明しろ。」

「簡単な話だ、ここと私のいた世界は別の世界だ。」

「どうしてそう思う？」

「第一に私の兄と同じ名のあなたがいる時点で、私の元の世界の平行世界だと認識した。そして、私がこの世界に来る前にいた世界と成り立ちが違う。」

「ちょっと待て、あの巨大ロボットがある世界にお前の兄はいるのではないのか？」

「違う。私は現実世界からゲームによく似た世界に飛ばされたんだ。兄とはもう何年も会っていない。……。それで、私のMSは何処にある？」

「MS？あのロボットの事か？」

「ああ。そしてMSというのはな……………」

全長十数メートルもある人型機動兵器であり、自身の機体はその中でもガンダムタイプというものに分類されること、そしてジェネレーション・システムなる存在によって欺かれた世界で戦い続けたこと、仲間を脱出させるために自身が犠牲になり、気がついたら

この世界に来ていたことを語った。

「……………それで、もう一度聴くが私のMSは何処にある？」

「……………実はその事だが、これを見て欲しい。」

小型のアタッシュケースを千冬が開くと、そこにはまわりを白く縁取った赤い宝石を包み込むようにする金色の羽根があるネックレスがあった。

「これは…………？」

「結論から言えば、お前のMSはIS化した。」

「……………何？」

何でも、コックピットから一夏を降ろした後、突然『世界観把握、最適化を開始します。』と声が聞こえ気がつけばネックレスに変化していたという。

「一応、解析しようとしたのだが使用者権限がないから情報開示不可だと表示されてしまうからお手上げ状態だ。」

「成る程、アプロディアの仕業か……………」

下手に情報を見られるわけにはいかないから、対処してくれたのだろっ。

『目覚めましたか、イチカ。』

「アプロディア、寝てる間に御苦労様。」

「人工知能まで携えているとは……………」

「それに綺麗……………」

何はともあれ、一先ず落ち着いた一同は今後の事を考え始めた。

「残忍だが、この世界にはお前が理解している通り、この世界の織斑一夏がいるから本当の名前は使えない。それで、新たに名前をつけなければならないが……………」

「それ以前に戸籍はどうするつもりだ？」

「それについては私の方で何とかするから安心しろ。で、どうするつもりだ？」

「名前か……………」

せめて、夏という字は残したい。

兄との絆を忘れないためだ。

すると、かつての記憶から1つの名前が思い浮かぶ。

「『なつき夏姫』というのはどうだろうか？」

兄がまるで王子様みたいだねと昔言われ、お姫様みたいでいいなとつらやましがられた記憶から姫という言葉を連想した。それを夏と組み合わせることで完成する。

「『夏姫』か・・・良いだろう、それで登録しておこう。」

そして、改めてヘブンスフェニックスのデータを取るためにアリーナへと私達は向かった。

目覚めた世界（後書き）

次回は主人公設定かもしれません。

主人公設定（設定画あり）

名前 織斑 夏姫 （おりむら なつき）

旧名 織斑 一夏 or イチカ・オリムラ

性別 女

声：櫻井浩美 （わからない人は風音さんと思えば良いです。）

ISが存在しない平行世界に存在していた一夏（女）。眼鏡をかけている時は大人しく優しい少女だが、外した状態では途端に冷徹な性格になり、戦闘に特化する。戦闘時や感情が高ぶると軍人としての性格が強く現れる。実はアムロすら超えるニュータイプである。刹那が真のイノベーターならば、彼女は真のニュータイプともいえる。ただし、覚醒した影響なのか髪の一部が白くなっている。

メカオタクで、特にガンダムは小さい頃から好きだったという変わった性格の持ち主。機械に囲まれるとハイテンションになる。Gジエネワールドをプレイ中に、突如としてゲームに酷似した世界に迷い込む。

数々の世界の戦いを経験し仲間を集め、ジエネレーションシステムとバルバトスを見事倒すものの、仲間たちを脱出させるためにヘブンズフェニックスを駆って犠牲になったのだが、IS学園に気がつけば転移していた。

その後、千冬に義理の妹として迎えられた。（表向きは遠縁の親戚）

> i 2 2 4 6 2 — 3 0 0 6 <

制服はリボンからネクタイへ変更し、コートのようなデザインに改造されている。ミニスカートはそのままである。

技能

独自設定あり

真のニュータイプLv・MAX（感情が高ぶると内なる力が解放され、自身の攻撃力・防御力が上昇する）

機械技術Lv・MAX（あらゆる機械技術に精通した技能。どんな技術だろうと当たり前のようにいじれる）

統制Lv・MAX（リーダーを務める際の連携攻撃が精度上昇）

歴戦の勇士Lv・MAX（ユニットの総合攻撃力上昇）

蘇る不死鳥Lv・MAX（どのようなことがあると、不屈の精神で立ち上がる。大ダメージ時、回復力上昇）

プレッシャーLv・MAX（自身を狙うユニットの反応値低下）

集中力Lv・MAX（ピンポイント攻撃時、対象の受けるダメージ上昇）

専用 IS ヘブンスフェニックス

最終決戦において、大破したハルファスと一夏（夏姫）のフェニックスが思いの力、共振エネルギーによって融合進化したMSがアップロディアによってISへと変化されたもの。

カラーリングはフェニックスのものだが、金のラインと外見はハルファスのものと酷似している。また、2機の性能を組み合わせるのでその能力は計り知れない。

基本武装 ビームサーベル×2

ビームライフル

クロス・メガビームキャノン？

フェザーファンネル

バーニングノヴァ

以下、後々追加予定。

後付武装 『オプションパーツ・システム』という3つまでパーツが装備可能な機構が存在する。

ワンオフ・アビリティー（単一仕様能力）

『ガンダムに愛を込めて』（サンキュー・フォア・ガンダム）

自身の機体と味方機の性能を一定時間、フルバースト最大解放する能力。

使用者との絆が強いほど超一撃状態になり、通常またはエネルギー量が低い場合は超強気状態になる。

装甲：ナノスキン装甲

自己再生能力を持った装甲、シールドエネルギーを常に5%回復する。

その他

アーマシユナイド・ピストル

夏姫が常に携帯している拳銃。

Dアストレイのカイトが使用するナイフ付きピストルをイメージして作られた。速射性と命中率が高い。

鋼糸

ネギまのエヴァのように糸を使い、攻撃をすることができる。

主人公設定（設定画あり）（後書き）

今のところ、白式とラファールが魔改造予定。

未知への探究（前書き）

今回は短いかも？

未知への探究

アリーナでの運用試験を行う前に、国際IS委員会の信用できる者達への説明を行う事になった夏姫は千冬達と共に地下にある会議室へと向かっていた。

事前に機体に存在するオーバーテクノロジーのデータはブラックボックス化し、情報開示時は必ず自分を通すように夏姫は伝えた。

なぜなら、中には世界を本当に終わらせてしまう程の機体の情報が含まれているからだ。特に ガンダムとか。

会議室に着くと千冬から委員会メンバーへの説明が行われ、スクリーンにヘブンスフェニックスに記録されたMS及びMAの映像が映し出された。ワールドシグナル戦からジェネレーションシステム戦までの全ての戦いの記録と共に。

数多の世界が重なり合って1つの世界となっていたので、目を疑うような技術に皆、驚きを隠さなかった。軌道エレベーターやコロニーなどは特に驚かれた。

そして、夏姫は技術提供を可能な限り………といっても、再現可能であり危険度が低いものに関して行う事を条件にIS学園の生徒としての権利と、どの国にも属さない無国籍者のライセンスを手にいれる事になった。勿論、定住国は日本である。

また、現在有名である織斑一夏の関係者 であるので、織斑千冬の保護下……つまりは義理の妹として向かい入れられる事になっ

た。一夏とは近いうちに、面会する予定である。…………遠縁の親戚としてだが。

千冬としても、軍人であつた夏姫が一夏のボディガードを勤めてくれることができる立場にいるのは好都合だった。

説明を終えて、今度は予定通りにISの運用試験を行うためアリーナへと到着する。千冬から改めてヘブンズフェニックスを受け取り、首へとかける。

「……よし、夏姫。ISを起動しろ、最初は戸惑うかもしれないが、すぐに慣れるはずだ。」

「了解した。アプロディア、サポートを頼む。」

『わかりました、装着を開始します。』

黒いISスーツに光の衣が纏い、次々と装甲が現れていく。胸部は

赤い装甲で覆われ、間接部分などに金色のラインが走る。Vアンテナが頭部に展開されると完全に夏姫はヘブンスフェニックスと一体化した。

「これは……自分がガンダムになったようだな。」

何処かのガンダムバカの夢をこんな形で体現してしまった夏姫は苦笑しながら、アリーナに展開されたターゲットを見据える。

「よし、展開したな。では、ターゲットを性能を確認しつつ撃破する。」

「了解。織斑夏姫、運用を開始する。」

バーニアを吹かし浮上すると、基本的な武装であるビームライフルを用いて狙撃をする。

的に当たるのを確認するまでもなく、引き抜いたビームサーベルでISにかかるGをもとめせず一気に駆け抜け切り裂くと今度は背部の翼に搭載された誘導兵器、フェザーファンネルを起動させた。

「行け、フェザーファンネル！！狙い撃て！！」

ニュータイプである彼女の意思に答え、8機のファンネルが翼から

飛び出すと、まるで生きているかのように動き回りを射抜いて行く。夏姫はまだ止まらない、止めとばかりにクロス・メガビームキヤノンでマルチロックし、残ったターゲットを全て破壊尽くした。ちなみに……どれも全て、正確に中心を撃ち抜いていた。

数多の戦場を駆け抜けた彼女にとって、この程度の事はとても容易いことだったのだ。

「……………目標の全撃破を確認。これより帰投する。」

そう言って、ゲートへ戻る夏姫。

彼女の瞳にはただ青空が雲一つなく映っていた。無限の空が不死鳥を受け入れたかのように……………

未知への探究（後書き）

次回は・・・いきなり本編に突入？

ISV インフィニット・ストラトス・バリエーション 計画、始動（前書き）

少しシリアスじゃないっぽいです。

特に最後らへん。

ISV インフィニット・ストラトス・バリエーション 計画、始動

「……… ISV インフィニット・ストラトス・バリエーション 計画？」

一夏と一週間後に会うことになった夏姫は入学に向けた準備をするために部屋で一人ISの教科書に没頭していた。元々、メカには人一倍詳しく、夏姫はGジェネレーションワールドで培った知識を参考にして理解していき、今ではスラスラと読み進められるようになっていた。そんな時に千冬が部屋を訪れ、企画書らしきレポートを渡してきたのだ。

「そうだ、お前の持つ技術を研究しIS開発に役立てていくための計画だ。現段階では日本のみではあるが今後様子を見て進めていくつもりだ。」

「MSVみたいなものか……。今のところは倉持技研の打鉄の改修計画に参加するようだな。」

打鉄は刀型近接ブレードを装備した防衛重視型の量産型ISであり、各国で幅広く使用されている。しかし、ラファール・リヴァイヴと比べ若干性能が劣っているため強化改修した第三世代ISの開発中らしい。

問題はその開発が思うように進まず、このままでは次世代ISに遅

れをとる事になってしまふ。よって、何かの糸口……つまり、打開策として夏姫の技術提供が必要だという。

「出来れば3タイプ考案して欲しいそうだが、もちろん打鉄をベースにしてな。」

「3タイプねえ……普通に考えたら近接戦闘型、砲撃戦闘型、高機動型だな。」

一瞬、その全てを備えたストライクのストライカーパックスシステムを考え付いた夏姫だったが、今後の事を考えて、交渉のカードとして温存することにした。

ならばどうするかというと、マイナー的MSの中から適当な者を探すことにした。アプロディアに思い浮かんだMSのデータを次々にディスプレイに表示してもらう。

「もう考え付いたのか？早いな。」

「あくまで参考だ、状況を踏まえて検討する。」

「そうか。とりあえずでいいが、予定ではどのようなものにするつもりだ？」

「そうだな……まず、近接戦闘型だが……」

近接戦闘型はストライカー・カスタム、別名ガンダムカタナにする事にした。なぜなら、ナックルタガーを始めとした近接武装が豊富であるからだ。特にツイン・ビームサーベルやスパークナックルな

どは近接戦闘においてかなり役に立つだろう。

「成る程、サーベルだけでなく殴る武装があると少しは変わった戦い方ができるな。」

正直、アストレイRFと迷ったがやはりバックパックなどの問題から除外された。

次に砲撃戦闘型だが、ヘイズル改を選ぶ事にした。

ラーの方が良いかと思ったが、あくまで砲撃戦闘型なので近接武装は最低限であるべきだと感じあえて改の方にした。ビームサーベルとビームライフルはもちろんのこと、中折れ式連装グレネードランチャーにレールガンを付け加えたことで少し特殊な砲撃戦闘型となった。

そして、高機動型だが………悩んだ末、ツールギスする事にした。

同じく？の方にするか迷ったが、あくまで量産型ISなのでヒートロッドなどは自重する事にした。また、本来はGがとてつもない機体だが、ある程度は耐えられるだけの出力に変更する。血を吐かれては困るからな。

追々、？へと改修するのも良いだろう。

「意外に手が込んでいるな、好きなのかこういうことは？」

「まあな、幼い頃から機械いじりは好きだった。」

一応、Gジェネレーションワールドでそれが一気に磨きがかかったが戦争をしていたため、素直に喜ぶことができなかった。

自身の創案を二日後の倉持技研訪問までにまとめあげるために、夏姫は再び机へと向かい直した。

——二日後。

千冬と共に倉持技研へと足を運んだ夏姫は、普段とは違ってかわった雰囲気で見えていた。

「おおおおおっ！！凄い、メカの宝石箱だあ」

そう、今日は眼鏡をかけているためにただの女子高生的性格へと落ち着いていたのだ。ISに無我夢中だが……………」

「まさか、眼鏡のあるなしでこつも違うとは……………」

千冬が頭を押さえつつ、あきれたような顔をしていた。

「あははははははははは！！！！み・な・ぎ・っ・て・き・た・あ！！！！！！」

こうなった以上、彼女は止まることを知らない。

倉持技研の技術主任までもが挨拶早々、夏姫と意気投合し打鉄魔改造計画について熱く語り合い始めた。

これがのちに、プロジェクトISの打鉄に情熱を注いだ者達の軌跡として語り継がれることになるうとはこの時誰もが予想していなかった。

そして、そのプロジェクトに織斑一夏までもが巻き込まれる事になる。

「ヘックシヨイ！！……………風邪かな？」

ISV インフィニット・ストラトス・バリエーション 計画、始動（後書き）

白式は魔改造予定。

射撃武装も一応ある。

次回、今度こそ本編？

永遠なる（女性）包囲網（前書き）

電車の中で書き続けました。

だって、作者はショックだったんだ。

永遠なる（女性）包囲網

（これは……想像以上にキツイぞ！！）

時は桜の舞い散る入学式を迎えた頃、少年は一人唸っていた。

なぜならば、右を向いても女子、左を向いても女子、前を向いても女性教師、そして後ろには数週間前に家族になったばかりの義理の妹……つまりは女子がいるのだ。それだけではない、さらに周りには男子の姿がまったくない。

「そ、それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね！！」

二度にわたって生徒から無視された女性教師こと、山田真耶はヤケクソ気味にその言葉を言った。まあ、無視されるのは現在絶賛お悩み中の織斑一夏に興味津々過ぎて聞こえていないからなのだが。これ以上無視されるのは嫌だったのか山田先生は自己紹介へとすぐさま移る。

代わって一夏は周りの女子の視線に耐え切れず、偶然発見したファースト幼馴染こと篠ノ之箒の方へと助けを求めるように顔を向けたのだが、プイツと窓側に顔をそむけられてしまっていた。

（そりやないだろう！？……………って、俺もしかしたら嫌われているのか！！）

ただ単に好き過ぎて、素直になれないツンデレになっているだけなのだが、キング・オブ・トウヘンボクこと鈍感な織斑一夏はまるで気づけない。

仕方なく、義妹こと夏姫に助けを求めると自己紹介が近いことを親切にも教えてくれた。……おおっ、流石我が妹だ！！！！

「では、次は織斑一夏君、自己紹介をお願いしますね。」

「あ、はい！！」

少し冷静になって落ち着きながらゆっくりと席を立つと、途端に一夏に視線が集中する。

「えと、織斑一夏です。」

……うわ、名前言っただけで視線が強まった。どんだけ注目しているんだよ、俺に。

「趣味は……家事全般です。あ、あとマッサージも一応得意です！」

事前に夏姫から自己紹介の内容を暗記させられていたため、「・・・
・・・以上ですっ!!」なんて名前だけしか言わないで終わるな
どしないで済んだ。

自己紹介にあまり時間をかけるわけにもいかないので、次に自己紹介をする夏姫へ進もうとした時、教室のドアが開かれる。

「山田先生、クラスの挨拶を押し付けてしまつて悪かつたな。」

「い、いえ！副担任なのでこのくらい大丈夫です!!」

その割には無視されたりして、若干涙目であるが。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。私の仕事は弱冠十五才のお前達を十六才まで鍛え抜くことだ。私の言うことは良く聴け、いいな?」

「キヤー――！千冬様！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「お姉さまって呼ばせてくださいっ!!」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から!!」

じゃあ、ISはどうなのだろうか。二の次なのか？それよりも死ぬとするな。

クラスメイトが伝説的IS操縦者・織斑千冬の登場に歓喜し、ドM発言など何だかいかげんしいことを言い始める中。

「……毎年よくこれだけの馬鹿者が集まるものだ、感心する。わざと私のクラスに集中させているのか？」

と、呆れていたが好かれているのは満更でもないらしい。

「ち、千冬姉！どうしてここに！？」

スパアアアアアアン！と、出席簿によるきれいな音が鳴り響く。

「織斑先生と呼べ。それと、私がこのクラスの担任だからだ。」

「えええつ、そうなのか！？」

「……何だ、嫌なのか織斑？」

「いいえ、そんなことはありません！！」

慌てて言い返す一夏。そんなのを余所に自己紹介は夏姫の番になる。

「織斑夏姫です。趣味は機械弄りで、IS開発にも携わっています。変則的な企業代表としてではありますが、専用機持ちです。また、姓でお気づきの方もいると思いますが私は織斑先生と一夏兄さんの義理ではありますが妹です。一年間宜しくお願いします。」

「えっ！千冬様と織斑君の妹！？」

「いいなー！織斑君のポジションもいいけど、義妹ポジションは物凄く羨ましいっ！！」

「髪も雰囲気もクールで綺麗！！」

「しかも眼鏡っ子！！これは・・・萌えるっ！」

一夏だけでなく、夏姫までも視線が集中しクラスが慌ただしくなる。………というか、クラスメイトには百合な方が多いようです。こうやって少子化は進んでいくのか。

その後順調に自己紹介を終え、今は休み時間。クラスからの視線だ

けでなく、別のクラス・学年の人も一夏を見に来てから授業中以上
に追い込まれていた。

「・・・・・・・・ちよつといいか？」

声がするほうを見ればそこには幼なじみの箒がそっぽを向きながら
立っていた。クラス内から「先を越された！！」と聴こえたが気に
しない。

「話しがしたい。話す場所は屋上でいいか？」

「お、おう！わかった。夏姫のことも紹介したいからな。」

「私もその事について聴きたいことがあるからな、いいだろう。」

そんなこんなで屋上に着いたが話しがしたいと言った本人が何も話
さないもんだから一夏の方から話題をふることにした。

「とりあえず、夏姫の紹介からいくか。自己紹介でも話した通り、
夏姫は俺の義理の妹だ。」

「義理ということは、親戚か何かか？」

「あ、はい。遠縁ではありますが一応親戚です。1ヶ月程前に家庭
の事情で千冬姉さんに引き取られました。」

「そ、そうか。私は篠ノ之箒、一夏とは幼馴染だった関係だ。よろしく頼む。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。箒さん。」

夏姫の紹介は済んだので、箒からの話を再び待ったのだがまたまた話そうとしないので一夏は自分が知っていることを軸に話を切り出す。

「そういえば、去年。剣道の全国大会で優勝したんだって？スゲーナ！」

「な……なぜお前がその事を知っている！」

「それは新聞で見たからに決まってるだろう。」

「なんで新聞なんか見るんだ！」

「いや、普通に毎日の情報を得るのに使いますから見ていてもおかしくないでしょう箒さん。」

誉めたというのに、怒られた一夏をすかさずフォローする。新聞を読むのは悪いことじゃないですからね？むしろ、良いことですから。

「それより六年ぶりだな、すぐに箒ってわかったよ」

「！…………よく覚えていたものだな。」

「だって髪型同じだし、幼馴染のことは忘れるわけないだろう？」

その時、タイミングを見計らったようにキンコンカーンコンと予鈴のベルが鳴る。

「ベルが鳴ったし俺たちも教室に戻ろうぜ。」

「う、うむ。そうだな。」

箒は一夏が覚えていたのが嬉しかったようでどこか上機嫌だった。

「——であるからして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合、罰せられてしまいます。」

授業が始まり山田先生が教科書を読んでいる。

事前教育が成されている女子達と違い一夏はまったくの無知だったので、同じような状況に置かれていた夏姫は内容を全て暗記して一夏の家庭教師的役割をした。その成果もあってか、基本用語などはほぼ把握できた何とか授業についていつている状態にある。

「織斑君、何かわからないところがありますか？」

山田先生も一夏がついて来ているか、心配だったようで覗き込むようにして訊いていた。

「あ、えと、何とか大丈夫です。」

こう見えて一夏は努力家である、何せ本来受験する予定だった学校の判定は最高レベルまであったのだから。

「そうですか、よかったあ。でも、わからないところがあったら遠慮なく訊いて下さいね？」

ウィンクをし、胸を強調しながら言う山田先生。胸揺れすぎやねん・
・・・・。

何はともあれ、無事に初めての授業は済んだ。

「ちょっと、よろしくて？」

「ん・・・なんだ？」

二時間目の休み時間、夏姫と談笑していた時に一人の女子が話しかけてきた。名はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生であり貴族的な雰囲気を出している、ぶつちやけIS優遇社会で偉そうにしている女性の典型的なタイプだ。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないのかしら？」

「いえ、いきなり話しかけられたら皆そんな態度に出ると思いますよ？」

「だよな。・・・それで、どちら様？」

「まあ！わたくし、セシリア・オルコットを知らない？イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを？」

「確か代表候補生って、国家代表IS操縦者の候補生として選ばれた人間のことだっけか、夏姫？」

「そうです、そして大体は専用機を必ず持っています。」

「一応、しっかり予習はしているようですわね。ですが、ISについてわからないことがあれば・・・泣いて頼まれたら教えて差し上げますわ！何せわたくしは、入試で唯一教官を倒したエリートですからね！！」

「・・・・・・・・俺も倒したぞ？」

「な・・・・・・・・なんですって！？それは本当ですよ！？」

セシリアは大声を上げ一夏に詰め寄る。そして、顔が近い！！

「あ、ああ。何か突っ込んで来たからとりあえず避けたら壁に激突して気絶してた。」

「俗に言う不戦勝みたいなものですね。」

ちなみに、気絶した教官は実は山田先生だったりする。

「そういえば夏姫はどうだったんだ、入学試験？」

一夏が夏姫に訊ねる。

「・・・・・・・・うん、あれは入学試験というよりは評価試験と言ったほうがいいかな？」

「評価試験？」

「ほら、私、倉持技研でISV計画の開発主任やつてるから。打鉄の改修機のテストをやらないといけなかったわけで……」

入学試験代わりに打鉄壱型甲と打鉄壱型丙の評価試験を行ったことを話す夏姫。

夏姫は打鉄壱型丙、つまりはツールギスを。対する相手の教官は打鉄壱型甲、つまりはストライカー・カスタムを装着した……
・・織斑千冬だった。

「千冬姉と！？大丈夫だったのかよっ!？」

「まあ、一応は勝てただけど……」

最初はお互い剣と剣をぶつけ合ったりするような普通の戦いだっただが、段々動きが激しくなってきた千冬は巧みな連続攻撃を繰り返してくるようになった。対する夏姫も持ち前の圧倒的機動力で翻弄するも武装が標準的なため決定打を出せずにいた。

仕舞いにはバーストナックルをぶつけようとしたので辛うじて避け、硬直状態で隙ありのところに一気に攻めて倒したのだが喰らっていたら確実に危なかった。絶対防御があるとはいえ、痛い目には遭いたくはない。

「そんな……わたくしが唯一教官を倒したと聞きましたが・
・」

「“女子では”てオチじゃないか？」

「私は形式上、非公式でしたから、“公式で”というのも入りますよ？」

ピシッ！っと、何かが切れる音がする。

まあ、仕方ないだろう。非公式とはいえ、自分以外にも教官を倒した人間がいたのだから。

キンコーンカーンコーン……………

「っ！……………またあとで来ますわ。」

そう言ってセシリアは、席に戻っていく。

この時夏姫が、あんな事になるなんて……………（……………）思
いもしなかった。

「授業を始める前に、クラス対抗戦に出る代表者を決める。」

「一、二時間目にいなかった千冬が授業前にそう言った。」

「簡単に言えばクラス長みたいなものだ。誰かやろうと思っている奴はいないか？」

「織斑君を推薦します。」

「ええ！？ちよつ・・・」

「私も織斑君がいいと思います。」

「畳み掛けられたっ！？」

それだけではない。

「夏姫さんを私は推薦しまーす！！」

「私もー！！」

夏姫までもが、専用機持ち&織斑の関係者ということまで巻き込まれる。

「他に誰かいないか？いないなら織斑兄妹のなかで決めるぞ？」

「ちよつ・・・ちよつと、ま「待ってください！納得がいきませんわ！」」

一夏の反論の言葉を遮り抗議したのはセシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなん

ていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットに
そのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるんですか！？」

「（・・・俺は恥さらしなのか？）」

「（いや、そうは思わないけど。）」

正直同一存在が貶されるのは、夏姫にとって嫌なものである。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物
珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしは
このような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカ
スをする気は毛頭ございませんわ！」

そして、手でオーバーリアクションを取りながらセシリアは言う。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれ
はわたくしですわ！・・・大体、文化としても後進的な国暮
らさなくてはならないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛
で——『ダンッ！！！』——ッ！？」

その時、どこからか机を叩くような大きな音がした。・・・
いや、何処かはわかっていた。なぜなら、その音を出したのは——

「だったら、今すぐ荷物まとめて出て行け小娘。」

「「「「「「「「・・・え？」「」「」「」」

——眼鏡を外して、セシリアを睨みつける冷徹な雰囲気を出した夏姫だったのだから。おかげで、教室の温度は冬場並みに感じる。

「な、何をおっしゃっていますの？」

「聞こえなかったのか？出・て・行・け・と言ったんだ。」

「ど、どうしてわたしがそのようなことをしなければならないのですの！？」

「どうしてって？貴様は先程言った言葉を忘れたのか。『極東の猿』？……。ISはお前の言う『極東の猿』が造ったんだがな？そして、今ある貴様の代表候補生という立場も元を辿れば『極東の猿』こと、篠ノ之束博士がいたからこそ手に入れたものだろうが。」

「そ、それは……！！！」

「さらに付け加えて『後進的な国』ときた。……貴様、日本とよっぽど戦争がしたいらしいな？」

「そんなこと思っていないせんわよ！！！」

「貴様が思っていないくても、相手の受け取り方によってはそうとも取れる。それにだ、代表候補生は言わば代表とほぼ同一の存在……つまり、貴様の発言一つで国際問題になりかねんだぞつ！！！！！」

「ひい……！！！」

殺意ともとれる視線に怯む、セシリア。

「……かつて、夏姫がいた世界でもそうだった。一人、または一部の者達の言葉で世界を巻き込んだ戦いになったことがあるのだ。だというのに、セシリアはまるでそれを理解していない。だからこそ夏姫はキレたのだ。」

「今言ったことを理解できないのなら、貴様は早々に人生を終わらせるだろうな。」

「……。。。。。。。」

返事すらできない、それは周りと同じだ。今の彼女の前では誰であろうとプレッシャーに負けてしまい、怯えることしかできないのだから。

「……夏姫、眼鏡をかけてくれ。空気が重い。」

「ああ……。。。。。。ごめんなさい、怖がらせてしまつて。」

一夏の発言を受け、眼鏡をかけ直した夏姫は普段の大人しい夏姫へと戻った。同時にさつきまでの空気が嘘のように軽くなった。

「オルコットは自薦という形で立候補でいいな？それではクラス代表はISの模擬戦で決めることにする。勝負は一週間後の月曜。放課後第3アリーナで行う。織斑兄妹、オルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始めるぞ。」

「ちょっと待ってくれ、千冬ね・・・織斑先生！！俺は二人と違って専用機なんか持っていないし、訓練機だってまだまともに動かせてないんだぞ！？」

確かに一夏の言う通りだ。このままでは、私とセシリアに適うはずがない。・・・・・・・・ただし、専用機があるのならば話は変わる。

「安心しろ、織斑。現在急ピッチでお前の専用機が製作されている。勝負までには十分間に合うぞ。」

「ちなみに私の魔改造モノですから、楽しみに待ってて下さい、一夏兄さん♪」

何はともあれ、今日ここにクラス代表決定戦の開幕が宣言された。

NGシーン

「いいですか！？クラス代表は実力トップになるべき、そしてそれはわたくしですわ！……大体、文化としても後進的な国暮らさなくてはならないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——『ダンッ！！！！』——ッ！？」

その時、どこからか机を叩くような大きな音がした。……いや、何処かはわかっていた。なぜなら、その音を出したのは——

「歯を食いしばれ！！そんな貴様、修正してやるうううううううううううううううう！！！！！！」

「キャアアアアアアアアアア！！！！」

セシリアの顔に強烈なビンタをかました、眼鏡を外した夏姫だったのだから。……夏姫はまだ止まらなかった。

「代表候補生だからって、そんなに偉いのかっ!？」

「貴様は歪んでいる!!」

「セシリア・オルコット……お前を殺すっ!!」

某レーンさん、某刹那さん、某ヒロさんのごとくセシリアを攻撃し続けた。

なお、千冬が取り押さえるまでそれは続いたところに明記しておく。

終われ!!

永遠なる（女性）包囲網（後書き）

バイト先が5/24をもって閉店してしまうんだよ!!

バイト始めてまだ2ヶ月も経ってないぞ!?

どないすればいいんじゃない!!

次回、守るための剣

白き騎士の再臨の時が迫る。

守るための剣（前書き）

まずは白式が魔改造されます。

守るための剣

初日の授業を何とか無事に終えた一夏達は新たな住まいとなる寮室の廊下にいた。

「えーっと、俺は1025号室か……夏姫はこの部屋なんだ?」

「私の部屋は1026号室ですから、ちょうど隣ですね。」

「そうか、近くてよかったぜ。」

そう言つて一夏は自室へと入るの確認した夏姫は同じく部屋へ入った。するとそこには……某国民的電撃モンスターのようなものがあった。

「……ピカ。ユウ?」

これはポケ。ンですか?いいえ、のほほんさんです。

「やつほー、つつき」

「つ、つつきー?……って、それよりも布仏さんがルームメイトなの?」

「うん、そくだよ」

さいですか。

まあ、正直 暗部 関係者の人間が近くにいて良かった。あだ名の通りのほんとしていた彼女だがやる時はやりそうな気がする。ちなみにだが、夏姫は入学までの一か月間にIS学園の人物関係図を大体は把握していたため、更識家や布仏家などの 暗部 の人間についてまである程度理解していた。

「……………なら、話が早い。私は一夏の護衛を務めることになっているからその旨を『生徒会長』によりしく伝えといてくれ。」

「わあー、つつきーの裏モードだあ。凄くクールだねえ。」

「そりやどうも。とにかくよろしく頼むよ、布仏さん？」

「うん、わかったー!!」

とりあえず、事前に運ばれていた荷物を取り出し整理し始める。……えーっと、確かこれが寝間着で、これが普段着で、そしてこれが……………

「うわあ、つつきー拳銃持ってるんだー、ばきゅんばきゅーん!!」

「まあな、護衛をする以上これは必要不可欠なアイテムだ。」

夏姫の手に握られていたのはクリスタルのように透き通りスカイブルーの色をしたナイフ………が備え付けられた白い拳銃だった。

これはガンダムSEED DASTRAYに登場するカイトのナイフ付きピストルをイメージして造られた特注品だ。対IS用としてカスタマイズがされており、これだけでISとある程度は渡り合えるように設計されている。

銃弾数を確認した後、夏姫は一週間後のクラス代表決定戦に備え学園地下に設けられた自身の作業室へと向かおうとする。だが、その途中で廊下に座り込む一夏を見つけた。

「どうしたんですか兄さん………ドアが穴だらけですが何かあったんですか!？」

「いやな、ルームメイトが箒だったんだよ。で、偶然風呂上がりのところを目撃しちゃって………」

木刀でめった刺しにされかかり、命からがら逃げてきたという………ドアをこんな簡単に壊せるってどんだけの破壊力を出しているんだ箒さんは？

1025号室が一夏の部屋だと分かった女子たちが次々に集まり始めると同時に部屋のドアが開かれる。そこには和服の寝間着に身を包んだ箒がいた。

「あ……………箒、もう入って良いか？」

「……………入れ。」

なんだか面白そうな感じがしてきたので、詳しい話を訊く為に夏姫も部屋へと同行して入る。

「で、話を整理すると、お互いルームメイトが誰かわからなかった状態でバスタオル一枚の箒さんとりあえずベットに腰を下ろしていた兄さんがエンカウントしたと……………」

「まあ、そうなるな。」

「よし、これはどちらも悪いということぞ!!」

「なぜそうなるっ!?!」

さすが幼馴染、ハモリ方が実に良い。

「いや、ルームメイトが来るとわかっているのにシャワーを浴びていた箒さんも悪いですし、兄さんも事前に確認しましょうよ。」

「……………」

「それにですね、久しぶりの再会なんですから部屋が変わるまでの間ぐらい一緒に生活しても良いんじゃないでしょうか？」

「し、しかし、男女七歳にして同衾せずと言うし――！」

「（・・・・・・ほう、君はせっかくの機会をみすみす逃すと言うのか？）」「

「！？」

一瞬だけ裏モードになって耳元で囁いてやると、簞は雷が走ったように固まった。

「ん？どうしたんだ？」

「い、いやなんでもない――！気にするな――！」

「（フ・・・・・・）」「

まあ、そんな事で問題は一先ず解決しましたとき。

・・・・・・さて、お仕事、お仕事♪

「・・・・・・・・それで、今の所どこまで開発は進んでいるんだ？」

作業室で先に待っていた千冬は、夏姫と共に現在開発途中の一夏の
IS・・・・・・・・正式名称『ISV-001 白式』「ver.N
」の下を訪れ、開発状況について尋ねる。

「完成は最終調整も含めて当日になりそうだ。このままでも出せないことはないが・・・・・・・・。」

「武装面に難ありということか。雪片は燃費問題をどうにかしなければ素人には扱いきれんしな。」

「剣術については一夏の頑張り次第でどうにでもなるが・・・・・・・・これでは万が一の事態に対応できない。」

それにこの『白式』はかつて千冬が使っていた『暮桜』の後継機であると同時に、『白騎士』そのものであるのだ。カモフラージュをしつつ強化をしなければならない。

「そして武装面は現代兵器にまるで適正なしときた、どうするつもりだ？」

「簡単な話だ、ビームだのミサイルだの実弾だのが駄目ならば、古代兵器にすればいい。」

「古代兵器……まさか弓矢でも装備するつもりか？」

「ああ、なるべく現代っぽくしてはあるがこいつは騎士だからな。ちなみに雪片には通常のビームブレイドとして変換できる鞘も付けておいた。」

二人の目の前にはまだ初期設定状態の『白式』が鎮座しており、まだ所々にケーブルが繋がれたままである。

「確か、篠ノ之博士が一枚噛んでいるのだったな？」

「……そうだ、『白式』のコアは裏向きは束が提供した。そして、初期段階までは関わっていたようだ。」

「なら、いつか彼女に問いただされる恐れがあるかもしれんか……。それに オプションパーツ・システム をこの世界で初めて導入したISだからな、余計に注目されるだろう。」

そう、『白式』は ヘブンスフェニックス に搭載されている オプションパーツ・システム という特殊な機構が備わっている。現段階では一夏のデータが揃ってないためにパーツは付けられていな

いが、今後の様子を見てカスタマイズしなければならない。また、装甲も特殊なフレームで造られており、使用者との高度な情報伝達及び思考伝達が可能であるので現行のISと比べ遥かに性能が高いのだ。

各国がこの事を知ったら喉から手が出るほど欲しがるだろう。．．．
．．．．．そんな簡単にくれてはやらんが。

「．．．．．なあ、千冬姉さん。」

「ん、何だ？」

「この世界はあなたの目にどう映っている？」

「．．．．．色々問題はあるがそこそこ楽しい世界という感じだな。」

「そうか．．．．．私はそうは思わないね。」

腰を上げて、まっすぐと千冬を見据える。

「．．．．．なぜだ？」

「いくらスポーツという形で落ち着いているとはいえ、軍事利用を推し進めている国は存在する。それに女性優遇社会．．．．．人はまた過ちを繰り返しているだけじゃないか。」

昔は男性優遇社会だった。女性はあくまで男性を支える存在としての役割しかなく、政治に参加することさえできなかった。そして、かつてない戦争を経験した世界は男女平等の世界を目指し平和を持続していこうと試行錯誤した。だが、ISという強力な兵器が女性だけにしか扱えないという事実が発覚したことにより世界はかつての歴史をなぞるように歪んでしまった。

それを当たり前にはいけないというのが夏姫の思いだった。

「エリート主義に貴族主義………いくつもの戦いは歪んだ考えによって生み出された。そして、それを打開しようとした者たちがいた。」

「それがお前がいた世界の仲間か？」

「そうだ、何度も間違えながら彼らは進み続け世界を変えた。……今、この世界にはそういう存在が必要なんだ。」

でなければ、世界は次の世代に争いの種を残すことになるだろう。だから、未来のために戦う者たちの存在が必要だと感じた。

「この学園は、そういった存在を生み出す場所であってほしいな………」

「……………」

今はただ、がむしゃらに進むしかなくても、それを忘れてはならない。千冬にはその言葉がひどく重く感じた。

『ISV-001 白式「ver.N」』

・武装（第一形態時）

雪片（雪片式型）

シールド内蔵ビームアロー

雪片の鞘“白桜”（雪片カバー時、対艦刀状態）

頭部プラズマホーン（雪片カバーオフ時）

MOVシステム（装着者と完全にリンクした時、発動。全身装甲

が一回り拡張され、プラズマホーンがV字型に割れる。）

フルシンクロフレーム

ネオ ज्याマー・システム（MOV起動時、質量を持った残像を展開。格闘能力向上）

・オプションパーツ・システム

ロウ特製パーツ（EN消費20%減少）

バイオ・センサー（覚醒・反応値+10）

シエルフノズル（機動力+10）

束が初期段階まで開発し、夏姫が引き継いで魔改造した第四世代IS。ISV計画の中で開発されたので、ISV-001のナンバーが与えられている。

燃費問題がオプションパーツなどで抑えられており、本来は存在しなかった射撃武装が追加されている。

また、装着者との超高度な意思伝達を可能にするフルシンクロフレームが使用されている。

メモリー・オブ・ヴァルキリー

そして、『MOVシステム』という『白騎士』の意思と同調するシステムが存在し、装着者の強い思念（守りたいという意思）を感じ取った時、装甲を拡張し青白いラインが露出する。（元ネタはF91の最大稼働時とユニコーンのNT-D）

オプションパーツを夏姫以外のISで始めて導入したISである。

(第二形態時) 『天騎』あまつぎ

雪羅ではない。

???????

???????

???????

???????

???????

???????

原作と同じく、臨海学校時に移行した『白式』だが、その形態は大きく異なっている。

なぜこうなったかは、今のところ不明だが第五世代と言っても過言でもないらしい………?

守るための剣（後書き）

シャルもある機体になります。

そう、ビームを無効化しないで。。。してしまうあの機体ですよ。

次回、不死鳥、空を舞う

不死鳥と白き守護者（前書き）

ホントは二話に分けて投稿するつもりでした。

タイトル変更しました。

不死鳥と白き守護者

あつという間に一週間が過ぎ、代表決定戦の対策に追われていた一夏は自分の専用機が完成したと伝えられて第3アリーナのピットに駆けつけていた。

そこでは既に待機していた夏姫が最終調整のためにディスプレイをひっきりなしに叩きつつけていた。その速さはキラ・ヤマトにも匹敵する。

「俺のISができたって聞いたけど本当なのか!？」

「うん、今、最終確認のために少し弄っているけど試合には十分間に合うよ。」

「そうか……良かった。それで、このISは何ていう名前なんだ?」

「これは私が開発主任を務める ISV計画 で開発されたIS、『ISV-001 白式『ver.N』』といいます。まあ、『白式』と呼んであげて下さい。」

「『白式』……これが俺の専用機……。」

自身の専用機に心奪われる一夏。

彼には理解できていた、この『白式』が自分のことを待っていたの

だと。そして、自分のやりたいことをさせてくれる頼れるパートナーであるということ。

「織斑、時間までまだ間がある。今のうちに初期化と最適化を済ませておけ。」

「30分ほどで済みますから、適当に肩慣らしでもしておいて下さい。」

「おう、分かった。」

最終調整を終えた『白式』に背中を預けると、彼を包み込むように装甲が固定化される。カタパルトの上に立つと彼と『白式』は勢いよくアリーナへと吐き出された。

「……………さてと、こちらはこちらで自分の準備でもしますかね？」

そういつて彼女もまた自身のISを起動させ、調整を行い始める。

セシリアとの対決の時間となり、夏姫はピットにてセシリアのISを分析していた。

「ピットはストライクフリーダムに外見こそ似てはいるが……
・まだ、完全な実用段階には至っていないということか。」

事前に入手した情報によればセシリアのIS『ブルー・ティアーズ』はイギリスのBT兵器試作1号機であり、ピットの名前から機体の名前はきているらしい。一応は6機を装備しているがそのうち2基は誘導ミサイルでありピットではない。差し詰め、劣化版ストフリというべきか。

「織斑妹、試合の時間だ。発進の準備を急げ。」

「了解、すぐにも出られます。」

「……………一つだけ言っておくことがある。」

「何ですか、織斑先生？」

「実力の差というのを見せつけてこい、それがオルコットにとって良い経験になるだろう。」

「はい。」

返事をしながらカタパルトに『ヘブンスフェニックス』を固定する。

『カタパルトスタンバイ、システム・オール・グリーン。進路クリア、発進……どうぞー!!』

「織斑夏姫、『ヘブンスフェニックス』出るぞっ!!」

下半身に力を入れ、勢いよくアリーナへと飛び出すとそこにはすでに待機していたセシリアがいた。

「随分と遅かったみたいですね。まさか逃げ出してしまったのではと思いました、安心しましたわよ!」

「そりゃどうも。……で、先日言ったこと少しは考えてみたか?」

「……ええ、流石に思い返せばあの時のわたくしは言い過ぎでしたわ。」

「ならよしだ。では、始めるぞ!セシリア・オルコット!!」

「ええ!!それではお先にリードをさせていただきますわ!!」

スターライトmk?のセーフティーが解除され、銃口が夏姫の方へと向けられと同時にレーザーが発射される。

セシリアは先手を貰おうとしたようだが、ニュータイプである夏姫は直感的にそれを感じ取り難く回避運動を取って見事かわすことに成功した。

「フン、当たらなければどうということはないっ!!」

「思ったより反応速度がよろしいようですわねっ!!」

続けざまにスターライトmk?が連射されるが、夏姫はそのレーザーの間を巧みに動き回りつつビームライフルで牽制する。

「は、速い!!」

「速さだけではないさ、火力もこちらの方が上だっ!!」

4つのクロス・メガビームキャノンから光の奔流が放たれると、セシリアへ向かって一気に襲いかかる。対するセシリアもギリギリではありながらも回避していき、『ブルー・ティアーズ』を4基展開して夏姫へ向けて攻撃を開始する。

「……………見える!!」

「なあ！？」

2基のビットが接近して攻撃を仕掛けるよりも前に夏姫は持ち前の空間認識能力で把握しビームライフルで破壊する。それだけではない、ビームサーベルをブーメランのように投げると、それに目掛けてビームライフルを連射して残るピットを破壊する。これはカミーユ・ビダンが用いたビーム拡散攻撃であり、ビームによる波状攻撃を仕掛けることが可能である。

「ブルー・ティアーズがこうも簡単に……………！？」

「悪いがこういった攻撃には慣れているのでね……………それと、君には面白いモノを見せてあげよう。」

「面白いモノですって……………？」

夏姫が翼から展開した、面白いモノ（……………）。それはイギリスがまだ運用して間もないBT兵器を遥かに凌いでいる『フェザー・ファンネル』という覚醒兵器であった。

「なっ！？BT兵器ですって…！」

「驚くのは味わってからにするといい……………行け、ファンネル…！」

彼女の声に反応し、セシリアの周囲に展開するファンネルは網のようにはびこるを繰り返してセシリアの逃げ場を奪う。それに付け加えてビームライフルによる攻撃が絶えない。

「くっ………わたくしのとまるで性能が違う!!」

「それはそうだろう、だからこんなこともできる。」

セシリアは意識を完全にビットに向けなければコントロールできないが、夏姫のファンネルは脳波によるコントロールで動き、他の武装を展開しながら攻撃することができるのだ。

「そろそろ幕引きと行こうじゃないか!!」

夏姫はファンネルを自分の周囲に呼び戻し、クロス・メガビームキヤノン起動させつつビームライフルを構える。そして、一斉にセシリア目掛けて発射した。当然防げるわけがなく、セシリアはもろに直撃した。

『試合終了。勝者——織斑夏姫!!』

その後、セシリアは一斉射撃を受けたせいか気絶してしまったので夏姫と一夏の対決が行われたがまだ動かして間もない一夏の善戦も

空しく夏姫の勝利で終わった。というより、講義しながらの模擬戦のようなものだった。

そして、次は一夏とセシリアの対決となるのだがそこで皆は信じられないモノを見ることになった………

夏姫との戦いを経て、誘導兵器の特性を掴んだ一夏はセシリアを相手に引けを取らぬ戦いをしていた。

「お前のビットの弱点はもう、見切った!!」

シールドに内蔵されたビームアローが次々と放たれ、セシリアの動きを封じていく。

「くっ、やりますわね!!」

だが、彼女も負けてはいない。彼女とて代表候補生、素人である一夏に簡単にやられるわけにはいかない。2基のビットをわざと一夏に目掛けて突っ込ませ、一夏に無理矢理対処させる。その隙にスタ―ライトMk?によるレーザー攻撃を放った。

「ビットを犠牲にした攻撃!? 大胆だな、おい!!」

「普通のやり方ではあなたは倒せないと判断したからですわ。・・・正直、素人であるあなたがここまで動けるとは思っています。んでしたもの。」

「そりゃ苦労して勉強したからな!!」

「勉強だけでこんなに動けませんわよ、普通!!」

インターセプターと雪片（カバー状態）をぶつけ合い、お互いに距離を取る。

「いい加減、終わりにいたしますわよ!!」

残された2基のビットを固定砲台として使い、スタ―ライトMk?で一夏を狙撃する。集中砲火の間を掠りながらもくぐり抜けると、そこには誘導ミサイルを構えたセシリアがいた。

「かかりましたわ!!」

「うわっ、何だよこれ!？」

避けても避けても追尾してくるミサイルに驚く一夏。必死にビームアローを持ち前の機動性を出しながら放つものの、全く当たらない。連射こそ優れているものの、このビームアローは命中率・攻撃力ともに並みなのである。

「くそっ!!このままじゃ・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

逃げていてもいずれは当たってしまうかもしれない。だが、当たるということは敗北を意味する。それだけは一夏は嫌だった。

今まで守られてばかりであった少年はやっと手にした力で、やりた
いことがあるのだから。

そうそれは、『大切なモノを守る』ということ。

千冬自身と千冬が持つ名誉、そして自分の力となる『白式』を造っ
てくれた夏姫を守りたい。——だから、

「だから、俺は負けられないんだよおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお!!!!!!」

刹那、彼は光に包まれた。

——
声が聞こえる。

「あなたには………守りたい物がありますか？」

気が付けばそこは一面、空だった。立っている所は水面がただ広がっている。

「あなたには………守りたい人がいますか？」

先程より強く声が聞こえ、聞こえた方へ顔を向けるとそこには剣を地に突き立てた純白の甲冑の騎士がいた。

（ここは……いや、彼女は一体？）

そんな疑問を余所に『彼女』は問う、守りたいモノがあるか、と。

「……………俺は守りたい、自分にとって大切なものは全部！」

セシリアの戦いの前に俺は夏姫にこう言われた。

『力っていうのは、闇雲に振るえばただ人を傷つけるだけのものとなってしまうんだ。』

『だが、常に誰かの事を思いやり守ろうとする純粋な心の下で力を振るうのならば違う。』

『お前の歩む道は果てしなく修羅の道だ……………だが、やる価値はある。』

『ただ只管に守るための力を極めてみる、そうすればお前の夢はいつか叶うだろう。』

夏姫がどれだけの思いで何をして生きていたのかを俺は知らない。けど、自分には計り知れない経験をしてきたに違いない。だから、二面性を持った今の夏姫がいるのだろう。

「・・・・・・・・じゃあ、行こうか？」

いつの間にか白髪のワンピースの少女が目の前に現れていた。そして、彼女は一夏の手を握り言った。

「・・・・・・・・あなたに、力を。」

視界が再び現実へと引き戻された。

セシリアが射出したミサイルは一夏に命中する前に、破壊された（．．．．）．突如として強烈な発光を放った『白式』によってだ。

「な、何ですのこれ！？」

予想外の事態に驚いていると次第に光が収まっていく。そしてそこには、一回り装甲が拡張し青白く光るラインが浮き上がった、金色のV字アンテナが特徴的なISがいた。未だに発光したまま．．．．

「第二形態！？いくら何でも早すぎますわよ！？」

「．．．．．ああ、そうだな。だからこれは正確には第二形態じゃない。」

「第二形態じゃない．．．．．ですって？」

第二形態とは通常、第一形態で一定の戦闘データが蓄積されたときに発現するものだ。故に、戦闘をある程度は熟さなければならない。しかし、一夏が装着している『白式』は試合前に第一形態に移行したばかりにもかかわらず更なる変化を遂げていた。これを第二形態と言わずに何というのであろうか。

「織斑先生、『白式』が!!」

「先生、これは一体……!!?」

真耶が叫ぶように『白式』の変貌を伝える。箒もすかさず一夏の身を案じて問う。

「『MOVシステム』だ……」

「……まさか、いきなり発動させるとはな。もっと遅いものだと思っていたが。」

千冬と夏姫がそれぞれ声を漏らす。その様子は慌てた様子もなく、ただ冷静にモニターを見つめていた。

「『MOVシステム』?何なんですかそれは?」

「詳しい内容は話すことはできませんが、簡単に言えば装着者とISが完全に同調することで全性能が通常の倍以上になる機能だ。」

「装着者とISが……?」

「完全に同調する……………」

——『MOVシステム』、それは白式のコアを解析した夏姫が『白騎士』。『白式』であり、コアに意思が宿っていることを発見したことで造られた装着者との完全同調機能である。人機一体とも言える状態に一時的に……………装着者と『白式』の同調率が一定値を超えた時に発動し圧倒的までの機動性と反応性を出すことができるのだ。例えて言うのなら母親が取り込まれていたりする某人型決戦兵器のようなシンクロ率によって、その力は解放されるのである。

「そ、そんなことが可能なのですか？」

「まあ一応な……………ただし、いつでも発動できるわけじゃない。あいつの場合は『他者への防衛本能』が強く現れた時のみ発動する。」

『他者への防衛本能』、それはつまり誰かを守りたいという思いのカタチ。今の『白式』はそんな思いを一夏に実現させるために造られたといっても過言ではないのだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおっ！！！！」

上へ、左へ、右へ、下へ、前へ、後ろへ。

スターライトMk?のレーザー攻撃が容赦なく襲いかかるが今の『白式』は避けていく。……………そう、残像を出したままで。

その残像もただの残像ではない、質量をちゃんと持っているのだ(……………)

「何で！！こうも！！当たらないんですの!?!」

射撃に定評のあるセシリアでさえもその動きをとらえられない。何せ相手は空中で宙返りやアクロバットなど当たり前のように用いて回避運動を行っているのだから。

「こうなったら一か八かもう一度あの手を……!!」

「させるかああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

一夏はビームアローを出鱈目な軌道を描きつつ連射し、残されたビットが自分の下に来る前に破壊した。すぐさま雪片式型を右手に携え一気にセシリアへと詰め寄る。

「俺は守る!!今は千冬姉と夏姫の俺のためにしてくれた思いを!!」

「い、行きなさい、ティアーズ!!」

誘導ミサイルを至近距離から放つも、全てが紙一重でかわされる。その動きの名は『無双雷電』。

「だから……力を貸してくれ!!白式!!!!!!」

『零落白夜』が発動し雪片にシールドエネルギーによって構成された刃が現れる。——そして、通り抜けざまに水平を保って斬

り裂いた。

『試合終了。勝者——織斑一夏——！』

「と、いうわけでクラス代表就任おめでとう——！」

「おめでとう——！」

「おめでとう——！」

「おめでとう——！」

「おめでとう——！」
「」「」「」「」

「皆……俺がクラス代表になっていいんだな……
つてなるかああああああああああああ！！！！！」

「……………えー。」「……………」

代表決定戦から一夜が明けて翌朝、SHRにて一夏のクラス代表決定が伝えられた。

「えーじゃない！俺は一勝一敗で、夏姫が二勝、普通に考えたら夏姫が代表だろ！？」

戦績から考えればそうなるのは当たり前なのであるが、ところぎつちよん。そう上手くはいかない。

「辞退したなう。」

「ツ。ツター！？懐かしいなおい！！！」

どうやら、世界はツ。ツターを過去の産物にしたようです。……
・ええい、これがISによって生まれた歪みかつ！！

「とまあ、冗談はさておき。ISV計画が忙しいんでこれから色々経験していく必要があるー夏兄さんへ譲りました。」

「国民的お昼番組!？」

そんなこんなで、一夏のクラス代表が決まりましたとき。

舞台裏、作業室にて。

「・・・・・・・・・・で、『白式』のアレは何を参考にしたんだ？」

「ん？アレですか、アレはですね・・・・・・・・・・ぶっちゃけ、ガンダムF91の最大稼働時のデータとユニコーンガンダムのNT-D稼働時のデータを組み合わせつつ改良しただけですよ？」

「どこから突っ込めばいいのかわからんが・・・・・・・・・・説明し

てくれ。」

「了解。まず、F91っていうのはサナリイっていうところが開発した小型MSで主人公シーブック・アノアの母が開発をしていた一機です。それで、最大稼働時は金色っぽいオーラみたいなものを出して、質量を持った残像を作り出します。」

「質量を持った残像？というと、あの一夏の動きは……………」

「そのものですね。んでもって、ユニコーンはF91よりも昔に造られたMSで、NT-Dという対NT用の殲滅機能が付いています。」

「ニュータイプ
NT？」

「ニュータイプっていうのは、宇宙に進出してより脳を効率よく使えるようになった人達の事です。大体は空間認識能力とかが強くなりますね。例外として未来予知したり、MSで隕石を押し返したりする人もいました。」

ちなみにティファとアムロのことね。

「何だその超能力者共は……………」

「そしてこの私もニュータイプであつたりします。」

「……………。それで、NT-Dについて詳しく説明を。」

「あ、はい。NT-D稼働時、ユニコーンは『デストロイモード』」

に移行し、装甲が拡張され赤いラインが浮き上がり、そして、一本角が左右に開いてV字アンテナをつくります。」

「『白式』の方は青かったようだが……………」

「あれですか？なんか、赤だと暴走しているイメージがあるので変えてみました。」

ついでに目に良いしね、青は。

「そんな理由でか！？」

「あと、イメージカラー的にも赤はなんか違いましたから。」

「まあ……………確かに……………」

この時、彼女たちは正解だった。何せ、後に箒の専用機になるISは紅い色をしていたのだから。

「あ……………そうそう、言い忘れていましたが。」

「ん、何だ？」

あえて夏姫は千冬だけに話すことにした、恐るべき衝撃の事実を……………

「ISのコア、造っちゃいました。てへ♪」

[illegible]

千冬のそれはすごい驚いた声が作業室に響き渡った。

不死鳥と白き守護者（後書き）

ぐだぐだやなあ・・・・・・・・

作者はバイトの面接が27日にあります。

今度のバイトは16:45から22:00までやることになりそうです。

ちなみにクリエイトね。

ISV〈打鉄改修計画〉（設定 4 / 29 ISアーマー絵追加）

ISV〈打鉄改修計画〉

JPK E はジャパン・クラモチ・エレクトロニクスを示す開発コードである。なお、改修機はそれぞれ第二世代ISのリペア機であるため『02R』がつけられる。

JPK E - 02R1 打鉄壱型甲

参考MS ストライカー・カスタム

武装

刀型近接ブレード

ナックルタガール

ツイン・ビームサーベル

スパークナックル

バーストナックル

打鉄を近接格闘タイプとして強化改修したISであり、参考として

ストライカー・カスタムが使われている。ビーム兵器と特殊格闘兵装が特徴的になっており、両腕に備え付けられたナックルタガーによる連続格闘攻撃と相手を一時的に麻痺させるスパークナックルは特に重宝する。バーストナックルは接触させれば広範囲に衝撃波が広がるために大ダメージが与えられるものの、シールドエネルギーの半分以上を失うという諸刃の剣ともいえるべき装備である。なお、テストパイロットとしてブリュンヒルデこと織斑千冬が装着した。

J P K E - 0 2 R 2 打鉄壱型乙

参考 M S ヘイズル改

短刀型近接ナイフ

ビームサーベル

中折れ式連装グレネードランチャー

中折れ式連装レールライフル

ビームライフル

打鉄を砲撃戦闘タイプとして強化改修した I S。参考としてヘイズル改が使われている。ブレードがナイフに変更しているのの中折れ式の 2 タイプに使い分けることができるライフルが特徴。本来、レ

ールガンは備わっていなかったが火力を強化するために急遽追加された。他のタイプよりかは比較的扱いやすい。

J P K E - 0 2 R 3 打鉄壱型丙

参考MS トールギス

両刃型近接ブレード

ビームサーベル

ドーバーガン（バズーカ）

ドーバーガン（ビーム）

打鉄を高機動戦闘タイプとして強化改修したIS。参考としてトールギスが使われている。ブレードは西洋剣のように両刃タイプのものに変更されており、実弾とビームが切り換え可能なドーバーガンが特徴である。通常時は他のISと同じく装着者に部分的に装甲をまとわせる仕様だが、高機動モードに移行する際は全身装甲へと移行し装着者の身の安全を優先するようになっていく。また、通常のISスーツでの装着が心配されたために全身を防御するためのISアーマーを必ず着なければならない。テストパイロットは織斑夏姫。

J P K E - 0 2 R 3 ? 打鉄壱型丙カスタム

参考 M S トールギス ? + ? ? ? ? + ? ? ? ?

両刃型近接ブレード × 2

強化型 ? ? × 2

ヒートロッド

ビームサーベル × 2

バルカン

ビームサーベル (ハイパー)

メガキャノン

? ? ? ? ? システム

現段階では設計図上のもので開発はされていない壱型丙のカスタム機。カスタム前のものと武装が多く変更されている。あくまでデータ取り兼繋ぎ用の I S らしい。予定では 3 . 5 世代並みの性能で装着者は不明。

J P K E - 0 1 R 暮桜改 (仮)

武装

雪片？型

以下不明。

第1世代なのにいきなりのレベルアップを果たす予定のIS。もはや激チート？

ゴーレム？何ですか、それ？

UNIS - 000 ????????

武装 不明

夏姫が作り上げたコアを使って造られたIS。出番はとある場所を襲う際に使う？

ISV - 002 ????????

ISV計画の式号機。その詳細は謎に包まれているが、夏姫のコアが使われているわけではない。

その他

マンダラガンダム

暴走した倉持技研のメカニク達が作り上げた伝説的IS。本来はガンダム連合のリーダー機でもあり、デビルガンダム戦では各国のガンダムをまとめあげたほど。出番はあるのか・・・？

ビギナ・ロナ

Gジェネオオリジナル機体。元祖セブンスード的存在。小さいしガンダムっぽいけど恐るべき性能を持つ。出番は未定。

ネーデルガンダム

風車に成りすましてガンダムファイトを1ヶ月耐え切った風車ガンダム。必殺技は「ネーデルタイフーン」で、40機以上兄弟機がいる。出番はあるのだが、その役割が・・・

ISアーマー

>i22962—3006<

打鉄壱型丙の圧倒的までの爆発的機動力にISスーツでは耐え切れない可能性があるとして開発された装備。全身タイプのスーツというよりアーマーで、その外見はマブラヴオルタの零式衛士強化装備（斯衛仕様）である。なお、壱型丙に乗る際、夏姫は黄色のタイプを好んで着用する。（普段は99式衛士強化装備国連軍仕様）

高度な伸縮性を持ち、衝撃を瞬時に硬化する性質をもった特殊柔軟素材により防ぐことができ、各種装置を収納したハードプロテクター類で構成される。耐Gスーツ機能・耐衝撃性能・防刃性・耐熱耐寒・抗化学物質だけでなく、バイタルモニターから体温・湿度調節機能、カウンターショック等といった生命維持機能をも備えている優れもの。

あえて言うなら、エロいっ！！

ISV 打鉄改修計画 (設定 4 / 29 ISアーマー絵追加) (後書き)

絵を追加しましたが・・・下手ですみません。

混沌への序章（前書き）

明日は面接&バイト。

眠い・・・

混沌への序章

「あ、ISのコアを造っただと!？」

「そんなにくびふゆるらないでくらはい!!!（訳：そんなに首を揺らさないください!!!）」

危つく首がもげるところだったじゃないか、もげないけど。

「・・・・・・。それで、一体どのような経緯で造ったんだ？
言ってみろ。」

「あー、頭がクラクラする。・・・・・・そんな簡単にG
ジエネワールドの技術で改修できるかどうか不安だったんで調べて
みたんですよ、そしたら何とか大元の基礎理論は全てではないです
が解析することができて・・・・・・。」

「試しに造ってみた、というわけか・・・・・・。」

「まあ、公表するつもりはありませんから安心してください。それ
よりもどうしますか『暮桜』？」

「今のところはいらないかしれんが、いずれ一夏のことが必要に
なるかしれん。」

一応、一夏はVIPなのであるから命を狙われる危険がある。聞い

た話では過去に『亡国企業』なる組織に誘拐されたとか。

「ま、流石にそのまま（．．．）造り直すわけにもいきませんか、新装備のテストのためにも一機ISを仕立てておきましょう。」

「それが無難か．．．ん？これは？」

千冬が机にに散らばっていた資料の中からある一枚の設計図を取り出す。そこに描かれていたのは．．．

「何だこの釣鐘みたいな奴は．．．！？」

ネオネパール代表のキラル・メキレルが搭乗していた大きな釣鐘が特徴的なガンダム、『マンダラガンダム』だった。

「あ、それですか？それは『マンダラガンダム』といって、機動武闘伝Gガンダムに登場するガンダムですよ。」

「いや、そういうことを訊いているんじゃない。な・ん・で、ここに
あるんだと訊いているっ！！」

「何だそんなことですか、それはコアのリサイクルの一環で倉持技研で造ったからですよ。」

「貴重なISのコアで何くだらんことやっているんだお前達は！？」

む、くだらないとは失敬な．．．．．スペックはかなり高性能なんだぞ。特に曼陀羅円陣・極楽往生はかなりの威力を誇りますよ？

「それより『ノーベルガンダム』なんてどうです？某美少女戦士っぽくていいでしょう。」

「はあ．．．．．もう、突っ込まん。」

その後、数多のメカニック暴走シリーズを見た千冬は夢の中でそのIS達に囲まれる夢を見てうなされたという。

四月も半ばを過ぎた頃、通常授業からやっと本格的な実技．．．．．
・つまりはISの操縦訓練が始まることになった。

皆、外へ出て水着にも似たISスーツを着用して訓練を今か今かと待ち構えていたのだが、ここで生徒の一人があることに気が付いた。

「先生、夏姫さんの姿が見えないんですけど・・・・・・・・・・」

「あ、ホントだ！！てつきり先に來てたと思ってた！！」

「織斑先生、夏姫さんは一体どこに・・・・・・・・・・？」

次々と声上がり、代表してセシリアが千冬に尋ねる。

「織斑妹は少し遅れる、あいつが製作に関わった最新型のISスーツが先程仕上がったのでな。今は着替えている頃かもしれん。」

「最新型の・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ISスーツ？」

夏姫がIS開発に関わっているというのは先日の自己紹介で述べたので誰もが知っていた。だが、ISスーツにまで関わっているとまでは聞いていなかったのだ。

「ISスーツ・・・・・・・・というより、ISアーマーと呼んだ方がいかもしれんな。」

「うーん、想像できないな………実際に見てみないと。」

「わたくしも気になりますわね。」

「私もだ。」

それぞれが最新型ISスーツに期待に胸を膨らませる中、それは現れた(……)。

肩や腰、そして手に深い青の装甲を備え、全身を包み込むようなこれまた青のスーツが特徴的なそれは女性の体つきをこれでもかと言わんばかりに強調していた。また、顎の部分にはヘッドセットを兼ね備えスーツというよりアーマーであることをアピールしていた。

「………すまない、ISとの設定処理に時間がかかってしまつて遅れてしまった。」

「あ………そ、それが最新型のISスーツですか？」

「ず、ずいぶんとピッチリしてるな………きつくはないのか？」

「まあ、自分用にカスタマイズされているからきついことも緩いこともない。かなり動きやすいぞ、これは。」

「そ、そうなのか!! (目のやり場に困っている一夏)」

このISアーマー、通常のISスーツと比べて頑丈に造られており肌の露出がないのだがその代わり体つきが物凄く強調されているために異性でも同性であつても目のやり場に困っていた。それに夏姫はどちらかといえば巨乳である。

「ちょうどいい織斑妹、ISアーマーの説明をしてくれ。いずれ着る可能性の奴もいるかもしれんからな。」

「き、着る可能性つて、どういうことなんですの!？」

「その辺も踏まえて説明しますから、落ち着いて聴いてください。」

解説のために眼鏡をかけた夏姫は指を鳴らし、大画面モニターを展開する。

「このISアーマーはインフィニット・ストラトス・バリエーション計画、通称ISV計画で強化改修された打鉄の高機動タイプ『J P K E - 0 2 R 3 打鉄壱型丙』の圧倒的までの爆発的機動力にISスーツでは耐え切れない可能性があるとして開発された装備です。全身タイプのスーツというよりアーマーで、壱型丙に乗る際は必ず着用しなければなりません。また、高度な伸縮性を持ち、外からの衝撃を瞬時に硬化する性質をもった特殊柔軟素材により防ぐことができ、各種装置を収納したハードプロテクター類で構成され、耐Gスーツ機能・耐衝撃性能・防刃性・耐熱耐寒・抗化学物質だけでなく、バイタルモニターから体温・湿度調節機能、カウンターシヨツ

ク等といった生命維持機能をも備えている優れたものです。」

「えっーと、ようするに超多機能万能スーツってことか？」

「簡単に言えばそうなりますね。少なくとも皆さんが着ているスーツより高性能だってことは言えます。ちなみにこのようにカラーや形状が違うタイプも存在するので好みのカラーとアーマーを選ぶことができます。」

紫、青、赤、黄、白、黒など多彩なタイプが映し出され、皆の注目を一気に引く。ちなみに男性用もあるよ♪

「まあ、今のところは一部の人にしか試験配布されていませんが、後々は量産して販売する予定です。」

「ホント！？よーし！！卒業までには絶対手に入れるぞー！！」

「急いで貯金しないと!! 私はバイトをするぞおおおおおお
おおおお!!」

[illegible]

「ほとばしる熱いエロスで私は神話になってやる……！」

「これが私の……ISスーツだっ!!」

「夏姫ちゃん!! お勧めは何!? そんなでもって夏姫ちゃんは何色!」

「なんか………、凄い盛り上がりようだな。（男性用もあるのか………へそ出しは少し格好悪いからな、頼んでみるか。」

「そ、そうだな……（特に赤に惹かれるのはなぜだろう……）」

「そうですわね……（わたくしも早く手に入れて一夏さんの気を引かなければいけませんわ！）」

「（なんかどこかで聞いたことのある台詞が聞こえたような・・・）」

クラスメイトの熱が冷めぬまま、一夏・セシリア・夏姫の急降下と完全停止は行われ、終始夏姫はガン見されつづけたのは言うまでもなかった。

——IS学園校門前。

そこにはツインテールの小柄な一人の少女がいた。

「……………ここがIS学園」

夕方に突如として現れた少女はゲートを通り敷地内をどんどん進んでいく。

「えーと、受付はつと……………本校舎一階総合事務受付？……………どこよそれ」

メモを上着のポケットに無理矢理突っ込むと案内してくれそうな人を探す。ISを起動させて手っ取り早く探そうかと考えたが面倒なトラブルを起こしかねないと思い直した。この学園に入ったからには規則には従わなければならぬからだ。

（あいつ……………どこにいるんだろう？）

少女はかつて中学時代途中まで幼馴染だった人物に思いを馳せる。自分がいじめられていた時に颯爽と現れていじめっ子たちを倒してくれ、いつも優しくしてくれた彼を。

——ふいに、声が聞こえる。

「あのさ・・・・・・・・ことなんだけど」

近くから聞こえてきた声の方向に、『案内役ゲット!』と言わんばかりに反応しダッシュで向かっていく。

「ISアーマーのことですか?・・・・・・・・ああ、わかりました。男性用が欲しいんですね?」

「!!!!!!さすが夏姫だ、話が早い!!」

「大丈夫ですよ、そもそも男性では兄さんしかISは使えないんですから、ISアーマーの男性用は必然的に兄さんのです。代表戦まではデータがある程度蓄積されますので、移植作業が終わればすぐにでも支給されますって。」

「ほ、ホントかあ!?(腹だしタイプから卒業できるぜええええええええええええええええ!!!!)」

「何もそこまで喜ばんでもいいだろう・・・・・・・・」

一夏が心の中でサムズアップしているのを読み取った篤は苦笑する。

声の主は少女が待ち望んだ彼……だったのだが、彼女は彼の両隣にいる二人の少女に注目する。

（あんなに親しそうにしているなんて……誰！？それに白いメッシュの子は一夏のこと『兄さん』って言ってたけど、あいつに妹なんていたっけ！？）

せっかくの案内人を逃し、仕方なく少女は案内板などを頼りに受付へと唸りながら歩いて行った。

気に新聞部副部長は一夏に迫る。

「では、さらっとクラス代表になった感想をどうぞっ!!」

「なつた以上、精一杯頑張ろうと思います。」

「もつと熱いコメントが欲しいなあ〜!!例えば、『唯一の男性IS操縦者は伊達じゃないっ!!』とか。」

「ぶっ!!!」

夏姫は飲んでいたオレンジジュースに咽てクラスメイトに背中をさすられる。原因がそのセリフが彼女のよく知るアムロ・レイのものっぽいからなのを皆は知らない。

「んじゃあ、『何としても代表対抗戦を勝ち上がってみせる!!』でお願いします。」

「(ゴン!!)」↑柱におでこをぶつける音。

「な、夏姫ちゃん今度はどうしたの!？」

「いや……………何でもない。(なんでシーブックやねん!?)」

夏姫の奇妙な行動は余所に取材は続く。

「ん……………もう一声!!」

「『俺が……………俺がISだ!!!!!!』」

「まだまだいけるよ!!」

「『俺はIS操縦者、やってやるっじゃないの!!!!』」

「もつといけるよ!!!!」

「……………。(柱に手を付き、どう反応していいかわからない夏姫)」

まあそんなこんなで取材は終盤に差掛り、写真撮影ということになった。

「はい、それじゃそろそろ写真撮るよ。あーセシリアちゃんと夏姫ちゃんも一緒に良いかな?」

「え?いいいですけれど?」

「りょーかいです。」

もう割り切った夏姫はなんとか立ち直り撮影に加わる。

「クラスに3人の専用機持ちだからね。握手とかしていると良いかもね？」

「そ、そうですね。あの、撮った写真は当然、頂けますよね？」

「私もくださーい!!」

この世界に来てあまり写真を持っていない夏姫は是非とも今回の写真は欲しかった。

「そりゃ勿論よ!はい、じゃあいくよ」

新聞部副部長が準備に取り掛かる。

「握手してと……あーもうちょっと笑って、そうそう。リラックスして……それじゃ撮るよー」

そしてシャッターが切られようとした時、先程まで座っていた女子達が目にも止まらぬ速さで入って来た。

「なっ……は、速い!？」

「何故、全員入ってますの!？」

「「「「「「「「一緒に写りたいからに決まっているでしょう!」
!」!」!」!」!」!」!」

ですよねー、せっかくの機会を皆さん逃しませんよねー!

その後、皆酒に酔ったように騒ぎ始め予定時刻より30分もオーバーしてお開きとなった。

今回の件でわかったことは、1組はかなりノリの良いクラスだということだ、まる

「もうすぐクラス代表対抗戦だね」

「そうだ、二組のクラス代表が変更になったって聞いてる？」

「あー、何とかって転校生に変わったのよね？」

もうすぐ開かれるクラス代表によるクラス対抗戦の話題が朝から絶えない。

「名前知らんのかい！？」

「それよりも今の時期に転校生？」

「うん、中国から来た子だって」

「ふん、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

「いや、もしかしたら織斑君目的かもよ？」

「有り得るとしたらそちらの方が濃厚だと思いますよ。」

「どんな奴なんだろうな？・・・強いのかな？」

「うーん、今の所は専用機を持っているのって一組と四組だけだし余裕じゃないかな。」

そんな他愛のない会話を繰り広げている時だった、少女が現れたのは。

「その情報、古いよ!!」

突如として前のドアから聞こえた声に一組の生徒は一斉に眼を向けた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には優勝できないんだから!!」

「鈴・・・・・・・・お前鈴か!？」

「そうよ、中国代表候補生、凰鈴音!!今日は宣戦布告に来たって訳!!」

ビシィ!!と一夏へ指を向けながら堂々と宣戦布告をした少女は中国代表候補生かつ、一夏の幼馴染であった凰鈴音だった。

混沌への序章（後書き）

ネギまの超鈴音といい鳳鈴音といい、なんで中国人キャラには鈴音が
多いのだろう？

鈴の音は鳴り響き・・・（前書き）

大学から更新。

今日は生物とドイツ語やっておならばだぜ！！

鈴の音は鳴り響き・・・

突然一組に現れた二組の専用機持ち転校生こと、凰鈴音。彼女は堂々と現れ、クラス代表の一夏へと宣戦布告をかました。

「あ、あれが二組の転校生!？」

「中国の代表候補生・・・・・・・・・・」

「よく考えたらこの学年、専用機持ち多くない・・・?」

実はもつと増・え・る・ん・で・す!!という衝撃の事実をまだ全員が知ることはなかった。

「だ、誰ですの?一夏さんと親しそうに・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・病むなよ!絶対に病むなよ!？」

セシリア・オルコットは突如として現れた一夏の知り合いにライバル心を燃やすと共に、仲の良さそうな雰囲気には嫉妬を燃やしていた。ヤンデレ化を阻止するために夏姫が動いているのは言うまでもない。

「鈴、何格好つけてんだ?すっげえー似合わないぞ?なあ夏姫?」

「そこで私に振りやがりますか兄さん……………」

というか、世の中にはもつと格好が悪い登場の仕方があるのだよ。それに比べれば今のはまだかわいい方だと思う。

「な、な、な、何て事言うのよアンタはー!?」

反応が悪かったことに腹を立てたのか、鈴は憤慨し叫ぶ。その後ろから一組では既に恒例のアレが迫る。

ゴスッ!!!!ゴスッ!!!!!!

「痛ったあああああああああ!!何すんのよ!?つて、あ……………」

しかも、出席簿ではなく拳。かつての世界最強の拳はそれはとても痛かっただろう、何気に二発だったし。

鈴は頭部にクリティカルヒットした拳の持ち主を確認すると途端に青ざめる。

「もう、SHRの時間なんだがな?」

「ち、ち、千冬さん・・・・・・・・・・」

まるで、怯えるチワワのように後ずさる鈴。・・・・・・・・いや、猫か。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、邪魔だ。」

「す、すいません・・・・・・・・・・また後で来るからね！！逃げないでよ、一夏！！」

まるで、覚えておけと悪役が言うが如く彼女は去って行った・・・・・・・・

時は経ち、昼休み。

第、夏姫、セシリアの定番メンバー＋その他と共に学食へと向かつ

た一夏は、既に並んでいた鈴を見つけ声をかける。

「ホント驚いたぜ、鈴が二組の転校生だったなんて。連絡ぐらくれよ?」

「そんな事したら劇的かつ感動の再会が台無しになっちゃうじゃない。」

自分で言うのかそれを・・・・・・・・・・と一夏は呆れる。

「おっ、相変わらずラーメン好きなんだな。ちょうど丸一年か、元気にしてたか?」

「元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ!」

「どついう希望だそれは・・・・・・・・・・?」

「「・・・・・・・・・・」」

仲良さげな二人を筈やセシリア、夏姫を始め、数名のクラスメイト達が見つめる。

「それで、何時日本に帰ってきて、何時代表候補生になったんだよ?」

「質問ばかりしないでよ。アンタこそ、ニュースで見た時ビックリしたじゃない!」

「俺だって、まさかIS学園に入るとは思わなかったよ。」

藍越学園とIS学園を間違えるなんてことがなければそうならなかったかもしれないと言つ一夏。……まあ、それ以前に彼は既にある人物の策略にはまっていたわけだが。

しばらくして、箒とセシリアが事情を探るべくズカズカと一夏の下へ行ったのを見た夏姫は慌てて追いかける。

「……一夏、そろそろ説明してほしいのだが?」

「そうですね、一夏さん!!ま、まさか、こちらの方とつ、つ、付き合っていますの!?!」

「兄さん、教えてください!!」

「べ、べ、べ、別にアタシは……!!」

付き合っていると勘違いされた鈴は顔を急に赤らめて慌てだした。

「そうだぞ、鈴はただの幼馴染だよ。」

「……………」

そう一夏が言つと急に鈴は無言の表情へとクールダウンした。

「ん、どうかしたか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何でも無いわよ」

鈴はフン！とそっぽを向き、一夏の頭には？マークが幾つも浮かんだ。

「幼馴染みだと？」

“幼馴染み”という単語に篤は反応する。それもその筈、彼女の記憶の中に凰鈴音という人物がいたことはないのだから。

「ああそうか、丁度お前とは入れ違いで転校して来たんだっけな。」

聞けば小4の終わりに篤は引越し、小5の初めに鈴が転校してきて中2まで一緒だったらしい。通りで面識がないわけだ。

「前にも話しただろう？篠ノ之篤、俺のファースト幼馴染みで、俺が通っていた剣術道場の娘。つまり、お前はセカンド幼馴染みって

ところだな。」

「ふうん、そうなんだ。」

上から下まで品定めをするように簾をじろじろと見る鈴。対する簾も同じようなことをしていた。

「初めまして、これからよろしくね（負けないわよ？）」

「ああ、こちらこそ（フン、私もだ！）」

「あの、火花散ってるんですけど………」

仲良くなるというよりはライバルとして認め合ったようで、眼からビリビリと何かが出ていた。触ってみよう………熱っ！！

「って、それより一夏！！この子、一夏のこと『兄さん』って呼んでるけど、一夏に妹なんていたっけ？」

夏姫へ指をピンと指し、説明を求める鈴。

「いや、夏姫は実の妹じゃないよ。夏姫は遠縁の親戚で千冬姉が1か月前に引き取った子だよ。」

「て、ことは義理の妹？」

「はい、そうなりますね。ちなみにですが私も専用機持ちですから、よろしく願いします。」

「日本の代表候補生……じゃないわよね？」

「私は国ではなく一応企業代表みたいなものです、自由国籍持ちです。がね。」

「自由国籍！？」

鈴が口をあんぐりと開けて驚く。そんな鈴を片目に一夏は尋ねる。

「なあ、自由国籍っていうのは何なんだ？ なんとなくの意味は分かるんだけど……」

「文字通り、『どこの国にも属していい自由な国籍』ですよ。確か、今年の生徒会長も日本人なのにロシアの代表候補生だったはずですが。」

「普通はそんな簡単に手に入るものじゃないんだけど……」

まあ、生徒会長の更識楯無は 暗部 の人間であつたりするから手に入ったのだろうが、夏姫は違う。彼女はオーバーテクノロジーを持ち、なおかつ本来ならばこの世には存在しない人間である。彼女

が特定の国に属してしまうことで世界のパワーバランスが狂ってしまうのだ。

この後、会話からいつの間にか省かれていたセシリアと鈴との間に一悶着あったりしたのだがそれは割愛させていただく。・・・
良い子のみんなは、人の話を興味がないからって無視しちゃだめだぞ♪by夏姫

「そういえばさ、セシリアとの戦いの時になった状態の事なんだけ
どさ……………」

「ああ、『MOVシステム』のことですか？」

「そうそう、それ。あれってやっぱり第二形態じゃないんだろう？」

放課後のアリーナで練習をするために、夏姫、セシリアと共にピ
ットに訪れていた一夏は届けられたISアーマーに着替えた後、先
日の試合で発現した状態について尋ねた。

「そうですね。あれは厳密に言えば単一仕様能力ワンオフアビリティに似たようなもの
です。稀少固有能力レアアビリティとでも言っておきましょうか。」

「レア……………アビリティ？何なんですの、それ？」

「単一仕様能力ワンオフアビリティが単なる能力の発現のための同調だとしたら、稀少
固有能力レアアビリティは人機一体……………完全にISと自身を融合させるた
めの同調を行うんです。」

それにより、装着者とISだけにしか使えない 本当の単一仕様能
力が発動され一時的な進化ともいえるべき変身を遂げるのだ。

「といっても、現段階では『白式』にしか積まれていませんし、い

つでも発動できるわけではないんです。」

「どのような時に発動できるのだ？」

「危機的状況もしくは他者への防衛本能が強くなった時です。火事場の馬鹿力かピンチになった時に現れるヒーローみたいなものですよ。」

「なるほど、だからいつでも発動できるわけではないのだな。」

「理解していただいて何よりです。」

ついでに『白式』開発秘話でも語っておきましょうか？

「ネタバレですが、私が手を付ける前の『白式』は雪片の『零落白夜』が単一仕様能力で、ブレードオンリーのISだったんですよ。」

「マジかつ!？」

「しかも、射撃武装は使えないことはないですが狙撃のために必要な機能が存在せず、後付武装すらないという俗にいう欠陥機でしたね。」

「……………それで本当に戦えますの？」

セシリアが言いたいことはごもっとも。なので改良という名の魔改造の果てにビームアローという専用射撃武装を付け、その他もろも

るの武装面を強化し、どこそのユーレイ企業とかに白式が奪われたりすることがないような認証システムを付けたり、意識持ちの白騎士のコアとのリンクシステムを付けたりとそれはもう苦労した。

「戦えないこともないけど、それができそうなのは千冬姉さんだけだと思う。」

「……………あー確かに。」

「確かに織斑先生なら可能ですわね……………」

IS着けても強い、生身でも強いあの人は世界最強種といっても過言ではないかもしれない。

「ところで、その……………打鉄の改修機は何時頃使えるようになるのだ？」

ISアーマーと合わせて打鉄強化改修機の説明もしたので、壱型甲に興味津々だった篤は訊いてきた。

「今は試験運用中ですから早くて5月上旬でしょうかね、武装面についての調整もありますし。」

バーストナックルはできるだけ使わないようにしないと軽いトラウ

マになりそうだからね……………

夏姫達との模擬戦を終えた一夏はISアーマーを脱いでシャワーを浴びた後、髪を拭いてベンチに座っていた。そこに飲み物を片手に持った鈴が近付いて来る。

「お疲れ一夏♪飲み物はスポーツドリンクで良いよね？」

「何だお前、ずっと待っていてくれたのか？」

「まあね……………そういえば結構長かったわね。」

「ああ、ちょっとシャワー浴びてな。」

「ふーん。あつ、これって一夏のISスーツ？随分と変わってるわね。」

「ああ、夏姫が倉持技研で製作に関わった特注品なんだ。これの前に着ていたのはへそが出ていたから変えてもらっただ。」

実際に着てみて分かったことだが、随分と着心地が良かった。それにどこかの潜入工作員みたいで格好が良い。

「へーそつか。それより……………やっとな二人つきりだね？」

「え？……………ああ、そうだな」

もじもじと落ち着きのない鈴に何事かと思った一夏だが、そんなのを余所に鈴は続ける。

「一夏さあ、やっぱり私がいないと寂しかった？」

「ん？まあ、遊び相手がいなのは大人なり小なり寂しいだろう。」

「そうじゃなくてさー、久しぶりに会った幼馴染でしょ？なんか言うことがあるんじゃない？例えばさ——」

「一夏！——」

鈴が何か言いかけた時、突然どこからともなく現れた箒が会話を遮る。

「どうした箒？」

「もうそろそろ夕食の時間だ、早く部屋に戻って支度をするぞ！」
そう言つてさつさと帰っていく箒。それを追いかけるために一夏は立ち上がる。

「お、もうそんな時間か……んじゃ、俺は箒と部屋に戻るぜ？ 続きは学食でな！！」

「ちょ、ちょっと待って！！今、あんたまるであの子と同じ部屋みたいなこと言ってるけどどういう事！？」

「ああ言つてなかったな。俺、箒と同じ部屋なんだよ。」

「はあ！？」

鈴にとって一夏の語つた衝撃の事実が雷が走つたように感じられた。

「突然の事だったから部屋を用意できなかったらしくてな、だから……」

「それで、あの子と寝食を共にしてるって事？」

「まあな、でも相手が箒で助かったよ。これで相手が見ず知らずの女の子だったら緊張して眠れないかもしれないからな。」

ちなみに最初は兄妹ということで夏姫と部屋が一緒になるものだと一夏は思っていたのだが、流石に常に近くにいたので護衛がしにくいと感じた夏姫の意見によってそうならなかったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ねえ」

「ん？どうした、鈴？」

「幼馴染だったら良い訳ね？」

「・・・・・・・・・・は？」

「だ・か・ら！！幼馴染だったら良い訳ね！？」

夕食前、1025室にて。

「——と、言う訳だから、部屋代わって？」

一夏は自室への道を歩いていると物凄い速度で鈴が一夏の部屋に大きめの旅行鞆をぶら下げ駆けつけ、部屋に入ると開口一番そんなことを言った。

「ふざけるな！！何故私がっ！？」

「いや、篠ノ之さんも男と同室なんて嫌だと思って！」

当たり前の如く鈴の言葉を拒絶する箒に対し、鈴はそんなことも気にせず都合の良い話へと持って行く。

「え！？嫌だったのか、箒？」

気付いてやれなくてすまんと謝る一夏。箒は慌てて弁解する。

「べ、別に嫌とは一言も言っていない。それにだ、これは私と一夏

の問題だ。」

「大丈夫、私も幼馴染みだから!!」

「……………どこが大丈夫なんでしょうか？」

某攻略本のキャッチコピーのような鈴の意見に対し、なぜかベットの隙間から現れた夏姫が冷静に答えた。

「あんた……………何でそこから？」

壁に耳あり、障子に目あり、ベット下またはクローゼットに夏姫ありなのだよ。というか、ぶっちゃけ一夏をもしもの時に逃がすための避難経路を使っているだけなんだけどね。

「企業秘密です。……………というか、ぶっちゃけ部屋替えはもう無理ですよ？」

「え？ど、どどういうことよ!？」

「……………さて、ここの寮の寮長は誰でしょう？」

本日来たばかりの鈴が知らない事実を入学してから今日まで生活してきた筈と一夏は当たり前のように答える。

「千冬さん（姉）」

「正解」

[illegible]

寮長が千冬姉さんであることを全くもって知らなかったために、事が上手くいくと考えていた鈴の驚愕した顔がより一層強く感じられる。

「そんな訳で今更部屋替えは不可能なんですよ、お分かりいただけましたか？」

「ううっ、わかったわよ．．．．．流石に千冬さん相手じゃ代わ
つて貰うなんて無理だし．．．．．ところでさ一夏、約束覚え
てる？」

素直に諦めた鈴は急に話を切り替えることにした。

「
•
•
•
•
•
約束？
」

「そうそう、小学校の時に……」

「小学校……約束……ああ！！思い出した、確か

鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚をつてやつか？」

「そう、それ！」

「奢ってくれるんだよな！！」

「え・・・・・・・・？今なんて言っただ一夏？」

「ん？酢豚を鈴が奢ってくれるんだろ？」

呑気に『よく覚えていたな俺！！』と自分を褒める一夏を見た鈴はワナワナと体を震わせる。

「最つつつつ低！！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて上等よ！！クラス対抗戦で叩きのめしてあげるわ！！」

乙女の涙を撒き散らしながら鈴は走って部屋を出て行った。

「な、何であんなに怒ってたんだ？訳わかんねえよ！？」

「一夏・・・・・・・・」

竹刀を構える箒を制止しつつ、メガネを外した夏姫は静かに告げた。

「な、何だよ夏姫？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・『酢豚』を『味噌汁』に変換してみる。」

「『酢豚』を『味噌汁』に変換・・・・・・・・？味噌汁を奢る・・・・・・・・
いや、違うか。」

まだ気付かない唐変木に気付かせるために夏姫は淡々と話し続ける。

「毎日味噌汁を作る・・・・・・・・その意味がまだわからんのか一夏
？」

「毎日・・・・・・・・味噌汁？・・・・・・・・まさか、アレなのか！？」

ようやく気付いたのか、このキング・オブ・トウヘンボクが・・・・・・・・
・・・・・・・・

「鈴は中国人だから味噌汁を酢豚に言い換えたんだろう。まったく、
何が『奢ってくれるんだろう？』だ。」

筈がまるで気づかなかった一夏に厳しく説教をする。たとえライブ
ルであっても乙女の恋を踏みにじる奴に対しては筈は援護してあげ
たようだ。

「とりあえずだ、乙女を泣かせたんだから謝罪の一つぐらいすぐに言ってこい。そんなにすぐに解決するとは思わんがな。」

「うう、わかったよ……ちょっと行ってくる。」

肩をがつくりと下げながら、トボトボ歩いて一夏は出て行った。

「まったく、一夏は………」

「世話の焼ける兄だな、まったく………」

残った女子二人は共通して一夏の唐変木っぷりを帰ってくるまで語り合った。

そして時間はあっという間に過ぎ、クラス代表対抗戦当日。

鈴に謝罪の言葉を入れたはいいが、約束を違えていた一夏に対する鈴の怒りはおさまらなかつたようで、代表戦で叩きのめしてあげると宣戦布告されていた。それが何の因果かトーナメント表に作用し一夏と鈴は第一回戦から戦うことになってしまった。

——アリーナ、ピットにて

「まさか一回戦から鈴が相手とは……………」

「何なんでしょう、この出来過ぎた展開は……………」

流石に夏姫もこの展開には苦笑するしかなかった。いずれ戦うことになったとしてもそれはまだ先の事だろうと考えていたからだ。一夏と作戦会議を暫くしていると、山田先生から通信が入る。

「あちらのISは甲龍^{シェンロン}、織斑君と同じ近接格闘型です。」

モニターに鈴のISのデータが表示され、スペックデータを確認する。

「ブレードはともかく、この衝撃砲は厄介だな。見えない上にどこにいてもほぼ射程圏内とは……………」

「しかも燃費重視みたいだぜ……………」『白式』とは大違いだな。」

応援に来たセシリアと箒が一夏の下へと駆け寄る。

「一夏さん、わたくしの時とは勝手が違いましてよ。」

「ああ、『MOVシステム』は滅多に使えないから実力勝負になるな。」

「油断はしないでくださいね？」

あの時は幾つかの偶然が重なって発動したようなものだ、そうそう連続して使えるはずもない。それを一夏はしっかり理解していた。

「分かってるさ、心配すんなって!!」

「そうだな、練習の時と同じ様にやれば勝てるはずだ。頑張れ、一夏。」

ああ、と箒に返事をし勢いよくピットから発進する一夏。アリーナ

上空には既に鈴が待機いた。

『それでは両者、既定の位置まで移動して下さい』

「ふうん、結構強そうなISじゃない。でも、見かけだけじゃ私は倒せないわよ？」

「そう言っているのも今の内だぜ、鈴。特訓の成果見せてやるぜ！！」

改めて気合を入れる一夏に鈴は忠告するように言った。

「一応言っておくけど、絶対防御も完璧じゃないのよ？シールドを突破する攻撃力があれば殺さない程度にいたぶる事は可能なの。」

「なら、精々いたぶられないように気を付けるさ。」

『それでは両者、試合を開始して下さい』

そして、クラス代表対抗戦一回戦第一試合が始まった。

試合開始のコールと同時に一気に間合いを詰めることにした一夏は雪片を片手に持ち前の機動力で鈴に接近する。対する鈴も双天牙月そくてんがげつを構えて迎撃した。

——ガキンツ!!!

互いの武器がぶつかり合い、火花を散らし鏖迫り合いが続く。本来ならばパワー面で劣る白式だが加速によって勢いをつけたためにその欠点をほとんどカバーしていた。しかし、それでも一撃を入れられるだけのチャンスはなかったため、鈴が一夏を引き離すために放った衝撃砲を感を頼りに回避しつつ後退する。

「初撃を防ぐなんてやるじゃない!!」

「……そりゃ、鬼教官たちに鍛えられたからな。」

経験の差で劣る一夏のために今日この日まで特別訓練がなされ、現段階で一夏が詰め込めるだけの技と知識を強制的に夏姫達は覚えさせた。その甲斐あつてか、戦術に関する思考が良く働くようになったのだ。

「あ、そうだ。あんたの機体の簡易スペックデータを見させてもらったけど、雪片のバリアー無効化攻撃は強大ね……。でもね、雪片を使わなくても攻撃力の高いISなら絶対防御を貫通して本体に直接ダメージを与えられるのよ。勿論、この甲龍も……。ねっ！！」

甲龍の非固定浮遊部位『アンロック・ユニット龍砲』から衝撃砲が弾幕のように発射され、不可視の弾丸が一夏に迫る。だが、先程避けたように反射的に攻撃を感知してシールド内蔵のビームアローを使い相殺しつつ回避する。

「えっ！？龍砲を避けただけじゃなくて打ち消した！？」

「たとえ眼で見えなくても、心眼っていうもんがあるんだよおおおおおおおおお！！！」

再び鈴が放った龍砲の弾幕の間を駆け抜け、今度は雪片（鞘力バーあり）で切り払って受け流しお返しとばかりにビームアローを撃つ。威力も命中率も並みだが速射性だけは優れるビームアローは雨のように鈴に襲い掛かりシールドエネルギーを徐々に削っていく。

「くっ………これじゃ迂闊に近寄れない!!」

「だけど、俺は近づける!!!!」

千冬直伝の瞬間加速を使い、鞘によるカバーを外した雪片で一氣に
イグニッションブースト
間合いを詰める一夏。そして、『零落白夜』を発動させようとした
時――

突然、アリーナのシールドを突き破って何かが落ちてきた。

落ちてきた衝撃で砂煙が巻き上がり、アリーナにいた鈴と一夏の視
界を塞ぐ。同時にアリーナの警報が一斉に鳴り響き観客席を物理遮
断障壁が覆い尽くし、避難命令が発動された。

「な、なに!?!」

「何なんだ一体!?!」

突然の異常事態に戸惑う二人であったが、彼らにも危機が迫ってい
た。砂煙が徐々に薄れていき、異常事態を起こした元凶が姿を現し
たのだ。

・ ・ ・ ・ ・ そのISは黒塗りの巨体と大きすぎる腕を持つ
た異形でとてもISには見えなかった。

鈴の音は鳴り響き・・・（後書き）

本当はもっと分けて書く予定でしたが、無理でした。

今回は本格的バトルを開始します。

夏姫が暴れます。

もしかしたら某風車Gがでるかもしれません。

舞い上がれ、友の為に（前書き）

やつベークリエイトのバイト落ちた・・・・・・・・

でも、5日と6日にコジマとブックオフの面接予定。

時給高え！！約1000円だってよ！！

舞い上がれ、友の為に

アリーナ上空から突如として侵入してきた謎のISは炎の中、重たそうな巨体で一夏達をじっと見据えていた。

「一夏、試合は中止よ!!すぐにピットに戻るわよ!!」

すぐに状況を把握した鈴は一夏に避難を促すものの、一夏は首を左右に振って叫ぶように答えた。

「駄目だ!!鈴!!こいつ、俺をロックしてる!!」

「ええ!?!?!どういうことよ!?!」

白式のハイパーセンサーは従来のISよりハイパーセンサーの感度が強いためにいち早く自身への危機を感知したのだ。そして、一夏は謎のISの狙いが自分であるということを理解する。

「理由なんて今は後だ!!とにかく、わかっていることは奴の狙いが俺だということだ。下手に逃げたりしたらアリーナにいる全員が危ないっ!!」

「くっ、戦うしかないって訳ね!!」

鈴が覚悟を決めた時、二人の間へ向けて閃光が走る。

「ッ！！散開だ！！」

「わかったわ！！」

謎のISが姿を現した頃。

——アリーナ管制室では緊急事態を示す警報が鳴っていた。

「システム破損！所属不明のISの侵入によりアリーナの遮断シールドを貫通しました！！」

真耶がいつもとは違い険しい声で予想だになかったこの展開で慌てる様子もなく、冷静にただ黙々と状況報告をしていた。

千冬はすぐに指揮を執り、マイクを片手に指示し始める。

「試合中止だ！織斑、鳳、直ちに待避しろ！！」

謎のISの攻撃の回避をしていた一夏と鈴に避難の呼びかけをしたのだが、二人から返ってきた通信によりそれは拒否される。

『無理だ千冬姉！！こいつは俺を狙っている！！逃げたりしたらどうなるかわからない！！』

「何っ！？鳳は、鳳の方はどうなんだ！！」

『大丈夫です！！あくまで狙いは一夏みたいで間接的に狙われているだけです！！』

「ちい！！すまない、一夏！！救援をそちらに寄越すには時間が少しかかるっ！！それまで持ちこたえろ！！」

『わかった！！』

一先ず外の状況を把握した千冬は同時に見ていたアリーナのステータスを再度確認する。

「レベル4・・・・・・全ハッチが封鎖状態か・・・・・・」

「おそらくあのISの仕業だな……初めから民間人には手を出すつもりはないということか？」

「とにかく、あちらに救援をすぐに送らなければならん。さっきも言った通り三年の精鋭部隊のシステムクラックには少し時間がかかる。……夏姫、すまないが行ってくれるか？」

「了解した、すぐに準備に取り掛かる。」

制服を素早く脱ぎ捨てると下に着ていた青いISアーマーが姿を現す。そして、ヘブンズフェニックスを起動させた。

「行くつて、どうやって行くつもりですの！？ただでさえハッチが開かないというのに……！」

「安心しろ、ちょっとしたフェニックスの『能力』を使うだけだ。」

簡単に説明すればこのヘブンズフェニックスにハルファスガンダムが持っていた空間転移能力が備わっているのだ。それを利用すればたとえ壁に阻まれていようが楽に移動することができる。

「でしたらわたくしもつれて行ってくださいな……！」

「私もだ……！」

セシリアだけでなく幕までもが声を上げ、救援部隊に加わろうとする。だがそれを千冬は却下した。

「オルコットはともかく、篠ノ之。お前は専用機持ちではないのだから行ったとしても邪魔なだけだ。それに相手の戦闘力は未知数なんだ、改修型ならともかく通常の打鉄では瞬殺されるかもしれんぞ。」

「し、しかしっ――！」

「それに連れて行けるのは一人だけだ、なら支援攻撃が可能なオルコットが適任だろう。あきらめ『いや、待ってくれ千冬姉さん。』……どうした、夏姫？」

二人のやり取りを聞いていた夏姫が口を挿む。ふと見れば、その手には一枚の紙が握られていた。

「通常の打鉄が駄目なら、『誰も使っていない専用機並みのI.S.』ならいいか？」

「……おい、改修型はまだロールアウトもしていない試験機だぞ？それを今使うというのか？」

「違う違う、前に話したじゃないか……『倉持技研の黒歴史』をな。」

「！？」

その単語を聞いた途端、千冬はびくつと体を震わせた。心配そうに真耶と箒が見つめる。

「あ、あ、あ、アレを使うのか!？」

「そうだ、アレの性能は打鉄を超えているし十分戦力になる。・・・」

・・・箒、地下2階の整備室に『待機状態が錫杖』のISが置いてある。それを使って奴が侵入した穴から攻撃に加われ、いいな？」

「！！・・・！！・・・何だかよくわからないが、一夏を助けられるならこの際何でもいい！！行ってくる！！」

地図が描かれた用紙を受け取り、すぐさま第3管制室を飛び出す。それを確認した夏姫は既にブルー・ティアーズを装着したセシリアを手を握り、転移の準備を開始した。

「（アプロディア！！座標軸固定、転移座標確認だつ！！）」

『わかりました、転移座標の誤差修正。目標エリアへの介入を開始します。』

「セシリア、転移したらすぐに一夏達と合流する。セシリアの担当はあらかじめ言うておくが支援射撃だ、わかったな？」

「わかりましたわ、今回の戦闘ではティアーズは邪魔にかなりま

せんもののね。」

二人に光が収束し始め転移開始を告げるが、セシリアにはどうしても聞きたいことがあった。

「それで、その……『倉持技研の黒歴史』とは一体何ですの……
……？」

「それは……見ればわかるさ……フッ。」

正直、アレは外見のインパクトがありすぎて説明のしようがない。
まあ、攻撃力は保障するが。

完全に光が二人を覆い尽くすと管制室から夏姫とセシリアの姿が消えた。

「しかし、本当に大丈夫でしょうか………?」

残された真耶は心配そうにアリーナを映すモニターを見る。

「山田先生、本人がやると言っているのだからやらせればいいだろう。」

「織斑先生!!何を呑気なことを言ってるんですか!?!」

「とりあえず落ち着け、コーヒーでも飲んで糖分を補給するといい。」

そう言つて、自分の分のコーヒーを準備する千冬。砂糖を入れようと砂糖入れ(?)に手をかけたのだが………

「………あの、それ味。素ですけど。」

指摘を受けて手を止め、コーヒーに入れようとしたものを確認してみた。確かにそこには『味の。』と書かれていた。

「………どうして味。素があるんだ?」

「さ、さあ．．．．．？ああつ、織斑君のことが心配なんですネ
！ーやっぱり弟さんですから．．．．．ね？」

真耶はニュータイプでもないのにその嫌な予感を感じ取った。

———何ですか！？このプレッシャーは！！

千冬は無言で味の。をコーヒーへ何杯も入れていた。もちろん、それを飲むのは千冬ではない。つまりは．．．．．

「．．．．．山田先生、これを飲むといい。」

真耶自身が飲むということだ。

「え．．．でも．．．味の。が入ってますよ？」

「だったら余計上手く感じるんじゃないのか？ほれ．．．．．」

「や、やめ．．．．．」

「飲め。」

「うう．．．．．はい．．．．．」

「・・・・・・・・それでいい。」

刑が執行され、真耶はもう二度とからかわないと誓った。

場所は変わって、アリーナ。

一夏と鈴は互いを囷にしながら回避運動を続けていた。もっとも優先的に狙われている一夏の方が囷にされている割合が多いのは当たり前だが。

「クソッ！！何であんだだけの巨体で機動力があるんだよ！？」

「それに大型ビーム砲よ？どれだけ贅沢なのよこのIS!!」

愚痴っていなければ彼らはやっていらなかった。自分たち試合を邪魔された拳句、命まで狙われているのだ。これほど理不尽な展開はない。

「まったくだ、製作者の顔が見てみたいぜ!!」

「私もよ!!」

まあ、その製作者は自分たちのISの大元の生みの親なのだが、そんなことを知らない一夏たちは散々悪口を言い放っていた。

——そんな時、上空に新たな機影が現れる。

「な、何だ！？今度は!？」

「まさかあのデカブツの増援じゃないでしょうね？」

その予想は大きく外れる。なぜなら現れたのは……………

「残念、不正解。正解は味方おまえたちの増援だ。」

「遅れてしまつてすみませんでしたわ!!」

同じ専用機持ちの同級生、織斑夏姫とセシリア・オルコットであった。

「セシリア!!」

「それに夏姫!!来てくれたのねっ!!」

二人でデカブツのISを相手しなければならなかったと思っていた一夏たちにとって、このタイミングでの味方の増援はありがたかった。

「……さてと、現状を確認するぞ。一夏、鈴、あいつと交戦していて何か気付いたことはないか？」

「何でもいつもと性格がまるで違うのよ……まあいいわ、強いて言うなら行動がワンパターン過ぎるってところかしら？」

「ああ、それは俺も思った。だから考えたんだ、『本当に人間が操縦しているのか』ってな。」

「なるほど……（アプロディア、奴の生体反応は？）」

『ありません、あれは完全に無人機……モビル
Dです。』

それならば全力での攻撃が可能となる。無論、後の解析のためにコ
アは傷つけないように配慮するが。

「二人ともシールドエネルギーの残量は？」

「私は200そこそこってとこね。」

「俺は300ぐらいだな。」

「意外に消耗していますわね……どうしますの、夏姫さん
？」

「単一仕様能力 を使って戦力の向上を図るしかあるまい。ヘ
ブンスフェニックス、白式、甲龍、ブルー・ティアーズを僚機ユ
ニットとして登録開始、同時にコールサインを順にアサルト2、ア
サルト3、アサルト4とする。」

夏姫が淡々と言うと、一夏たちのISのモニター上にコールサイン
とヘブンスフェニックスをマスターユニットとして認めたことを意
味するエンブレムが映される。それを確認した夏姫は 単一仕様能
力、『ガンダムに愛を込めて（サンキュー・フォア・ガンダム）』
を発動させた。すると一夏は『MOVシステム』を発動させただけ
でなく赤い光に包まれ、セシリアと鈴は青白い稲妻にも似た光に包

まれた。

「何、これ……………」

「『超強気モード』……………？それに性能が二倍に跳ね上がっていますわよ！？」

「俺のは『超一撃モード』か……………？え、嘘だろ！？こつちは3倍に跳ね上がったるぜ！？」

「どういふことなの夏姫！？」

「私のヘブンズフェニックス ワンオフ・アビリティ の単一仕様能力は味方と認めたISの総合性能を一時的に倍増させる能力なんだ。その倍率は好感度……………絆の強さによって比例するからセシリアと鈴は会ってまだ間もないから超強気モードだが、一か月以上も家族として過ごした一夏は超一撃モードになる。」

ただし、この能力の欠点は短期決戦で相手を倒さないといけないことが約束されてしまい、なおかつ一定ダメージを負うと通常のスペックへと戻ってしまう。

「とにかく、この状態をキープしつつフォーメーションで奴に攻撃を仕掛ける。前衛は私と一夏が、後衛のセシリアと鈴は支援と牽制を頼む、いいな？」

「わかったぜ！！」

「わかったわ!!」

「わかりましたわ!!」

各機が戦闘態勢に入り、黒いISを見つめる。

「では、行くぞ!!」

夏姫は掛け声とともに先頭を切って飛び出す。通常の人型形態ではなく、機動性を優先したバード形態へと変形したヘブンズフェニックスはビーム砲の巧みに避けつつ、黒いISを包囲するように軌道を取る。これは長年の戦いの中で彼女が生み出した高速攪乱機動戦術『魔女の鳥籠』ウィッチズ・バードケージと呼ばれ、一度この包囲機動に取り込まれたら脱出はほぼ不可能である。

「セシリア、鈴!!頼む!!」

「行きますわよ!!」

「当たったりしないでね!!」

セシリアのスターライトMk?と鈴の龍砲が夏姫のISの軌道コースの間をうまく狙っていき、黒いISの動きを封じつつエネルギーを削っていく。

「夏姫！！今だっ！！」

皆が攻撃中にずっと攪乱に徹していた夏姫はその軌道を大きく変え、アリーナを回るように加速する。そして、進路上に黒いISを捕捉すると一気に黄金の輝きを放ちながら突っ込む。

「喰らえっ！！バアアアアアアアニング・ノヴァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

ISは引きずられるように突撃され、アリーナの地面に大きな爪痕を残すようにして壁へと叩きつけられた。

「どうだ、やったか！？」

「あれだけの攻撃を喰らって無事の筈ないじゃない！！これでもまだ動くんだったらキレるわよ？」

「お二人とも！！まだ、安心するには早いですわよ！！」

「・・・・・・・・・・そうだ、まだ奴は！！」

夏姫の直感がまだ消えぬ危機を察知する。そう、まだ黒いISは損傷が激しいにもかかわらず起き上がっていたのだ。

「マジかよ！？くそう、このままじゃ……………！！」

「こっちの体力が持たないわよ！！どうすんのよ夏姫！？」

ついさっきやって来た夏姫とセシリアとは違い試合からずっと交戦していた二人には、これ以上の長時間戦闘は体力的にもう無理だった。それを理解していない夏姫ではない、故に二人へ後方へ下がるように進言する。

「どうするつもりですの、夏姫さん？」

まさか自分一人で戦うのではないのかと心配そうに尋ねるセシリアだが、彼女の予想は大きく裏切られることになる。

「どうするもこうするもない……………出番だ、マンドラガンダム『倉持技研の黒歴史』……………！！！！」

空に君臨する太陽に向けて彼女は叫ぶ。

——そして、それは（…………）現れた。

太陽を背にし、アリーナのシールドが破損してできた穴から颯爽と

「さあ行け！！マンドラガンダム！！忌まわしいISを（コアを破壊しない程度に）破壊せよ！！」

『・・・・・・・・わかった、行くぞ！！』

それは（・・・・）、錫杖を両手に構えて叫ぶ。

『曼陀羅円陣！！』

自身の周りを囲むようにエネルギー体が現れ渦を巻く。

『・・・・・・・・極楽往生おおおおおおおおおおおお
おおおおお！！！！』

彼女の魂の叫びによって球体が撃ちだされ、黒いISへと吸い込まれるようにして衝突する。ただ正面から攻撃を加えるのではなく、背後、右側、左側、そして頭上からも。

流石に四方八方からの攻撃に対応しきれなかったISは攻撃される

がまだだった。その隙に彼女は錫杖を強く握りしめ接近する。

「一夏達を傷つけるのなら、ここから．．．．．ここから．
 ．．．．．出て行けええええええええええええええええ
 ！！！！！」

——そして、一閃。

ISの足は切り裂かれて胴体は崩れるように地へと落ちた……。

[illegible][illegible]

「 ねえ。」

「……………何ですか？」

「・・・あれって、誰が乗ってるの？」

「・・・篠ノ之さんですわ、多分。」

「え・・・・・・・・・・？アレ、箒なのか？」

「そうだが、何か？」

「いえ、夏姫さん。アレは何なんですの・・・・・・・・・・？」

セシリアが指差した先には下半身に巨大な釣鐘をつけたお釈迦様のようなISを装着した・・・・・・・・・・箒がいた。

「だから言ったじゃないか、『倉持技研の黒歴史』マントラガンダムって・・・・・・・・・・」

そう夏姫が答えていると話題のISを装着した箒が咆える。

『夏姫ii!!何だこのISはああああああああああああああ!!?』

今更ながら箒がキレたので、とりあえず解説しておく。

「簡単に言えば、リサイクルしたコアで倉持技研の変態メカニク

達が造った高性能ISだな。まあ、第三世代には相当するんじゃないか？」

「え・・・・・・・・アレで？」

「マジ？」

「マジだよ。まさか、こんな状況で使う破目になるとは思わなかったが・・・・・・・・ククッ！！」

『笑うなあああああああああああああああ！！』

「いや、箒、笑うなっていうのは無理な話・・・・・・・・ぶっ！！」

あまりにも奇妙で滑稽な箒の姿に耐え切れなかったのか、一夏が噴き出す。・・・・・・・・これが箒の怒りの臨界点を突破させるスイッチを押してしまうことになった。

『一夏・・・・・・・・・・』

「ほ、箒さん？何でしょうか・・・・・・・・？」

一夏には自身に迫る新たな危機が箒から感じ取れた。・・・・・・・・でも、もう手遅れである。

『堪忍袋の緒が切れたっ！！・・・・・・・・今の私はあ！！阿修羅す

ら凌駕する存在だあああああああああああああああ！！！！
』

錫杖に仕込まれたビームサーベルを引き抜き一夏へ向けて突進する
筈。セシリアや鈴、夏姫は巻き込まれないように退避する。

「うわあああああああああ！！！！ちよっ、筈！！！！やめろ
って！！笑っちまったのは謝るから！！！！」

「逃がさんっ！！！！」

その後、千冬がやってくるまでその追いかけっこは続いたとさ。

そもでもって、場所は学園地下50メートルに存在する超機密エリア。

最高ランクのセキュリティパスを持つ人間でしか入れない場所に、夏姫、千冬、真耶の3人はいた。勿論、学園を襲撃してきた謎のISを解析するためだ。

「解析結果が出ました……やはり、コアは未登録のものです。」

真耶の告げたそれが意味するのは467機以外のコアが何者かによって製造されたという事実。

「なるほど……夏姫、他にわかったことは？」

「襲撃してきたこのISは独立稼働式だろう、遠隔操作にしては動きが単純すぎたからな。それとこいつの攻撃プログラムには特殊な命令が出されていた。」

ガラス越しに見える問題のISを示すように、コツコツとガラスを叩く。

「特殊な命令だと・・・・・・・・・・？」

「ああ、それも『織斑一夏が戦闘不能になるまで攻撃を停止しない』
というものがな。」

「つまり最初から民間人には手を出すつもりはなかったということか。」

「そうなるな。問題は、一体誰が何の為に寄越したのか（・・・・・・・・・・）
・・・・・・・・・・（）という点だ。」

千冬と夏姫は真耶を残し、別の部屋へと移動する。

「・・・・・・・・・・でだ、予想するとして誰がやったと考える？」

千冬が入ってすぐに切り出す。

「過去の誘拐事件のことを考慮に入れるなら、『亡国企業』の仕業・
・・と考えるのが筋だが・・・・・・・・・・。」

「違っのだろう、お前の予想は。」

「そうだ。今回の襲撃事件の犯人は、十中八九、『篠ノ之束』
だな。」

なぜなら、ISのコアを製造できるのは事実上、ISの母である篠ノ之束もしくは織斑夏姫だけなのだから。

「しかし、もしそうだとしたらなぜ一夏を狙ったのかだな……
・どう考える？」

「そんなもの一つしかないだろう、『実戦経験を積ませるため』だ。」

「!!!……そうか、あいつはそういう奴だったな。」

IS学園にいても、卒業後の社会でも一夏は世界から狙われる運命にある。故にそんな環境でも生きていけるように力を与えなければならぬのだ。だからこそその襲撃なのだろう。

「だが、今回の襲撃でIS学園は被害を被った。いくら何でもこれは強引すぎるな……。」

「そう言うと思って、既に対処はしておいてある。」

「何っ!? 夏姫、お前何を…….?」

「簡単なことさ……篠ノ之束には少しばかり痛い目に遭ってもらっ。」

夏姫はニヤリと口元をつり上げ、静かに告げた。

——月、篠ノ之束秘密基地にて。

都市伝説の中には月に宇宙人がいるからN。SAは近寄らないなんて噂があるが、実際は違う。そこには現在指名手配中の一匹の兎が住んでいた。——篠ノ之束である。

「ん——？何かな？あれ？」

珍しく見つめていたモニターには風車のようなパーツが特徴的な謎のロボットが漂っていた。・・・・・・明らかに人工物である。

「風車？でも、いつちよ前に顔がついているけど・・・・・・とにかく回収してみよー！！とおりやーーーー！！！」

基地の何処かからどこぞの太陽の翼を持つロボットの無限に続くパ
ンチのようなものが飛び出し、漂流物をガツチリと掴む。

「よし、一発で成功だね♪流石私！！さてさて、お待ちかねの解析
タイムだよ~~~~ヘイ！！！」

久しぶりに見た好奇心をくすぐる存在を調べることに頭がいっぱい
の彼女はこの時、自分に襲い掛かるある悲劇を予測することができ
なかった。いくら天才でも超能力者ではないのだ、できないこと
もある。

「それにしても、変なデザインのロボットだね~~~~誰が何のために
造ったんだろっ?」

そんな疑問をぶつけながら彼女は一人手探りでペタペタと触っている。そして、胸部の風車の中心に赤い何かのスイッチが収納されていることに気付く。

「むむむっ!!」『押さない方がええで?』か……そう言われると押したくなるんだよね~~~~!!ポチッとな!!」

なぜ関西弁なのかに突っ込むこともなく、彼女は躊躇いもせず赤いスイッチを押してしまった。すると――

『ターゲット目標を確認、これより対象(の衣服)を排除する!!』

「へ………?何?」

なぜがティ。リアボイスなのかはさておき、その風車型ロボットは突然羽根を高速で回し始めた。束は飛びずさりながら構えるが、予想を遥かに超えた風速が彼女に襲い掛かる。

「え、ちょ、ちょっと何!？」

とりあえず、このままでは危ないと考えた束は近くの柱に捕まり飛ばされないようにした。そのおかげでなんとか自分自身は飛ばされないようにはなったが……なぜかパンツが吹き飛ばされた。

そんなお願いを聞き入れることもなく黙々とガンカメラで撮影を続けるネーデルガンダム。終いにはどこからともなくケ。イアを取り出し束に投げつけた。

「何これー！！乳酸菌食品！？」

一部の人にはムフフな光景が作られ、シャッター音までがピークに達する。そして……………

『富。フラッシュ！！』

「うおっ、眩しっ！！！！！」

強烈な光を発して束の眼を眩ませると、何処へと消えてしまった。もちろん強力なジャミングにより追尾不可である。

[illegible]

基地内に白濁液まみれの全裸女性の叫びが響いた。

後日、倉持技研のラボに帰還したネーデルガンダムに収められた写真を見た千冬は過呼吸になりそうなほど笑いこけまくった。

舞い上がれ、友の為に（後書き）

バイト活動とレポートで忙しくなりますが、更新頑張ります。

歪みを抱えた転校生（前書き）

今回は個人的に短いです。

いやー前回の話とかはいろいろと書きすぎたので。

分けました。

歪みを抱えた転校生

「やっぱハヅキ社製のがいいかなあ？」

「え？ハヅキ社のもってデザインだけって感じじゃない。私は性能的に見てミューレイのスムーズモデルがいいと思うけど？」

「そのデザインが良いんじゃない！！」

「でも高いんだよねえ、あれ。」

「それよりISアーマーっていつ頃発売されるんだろうね？従来のと比べてかなり性能差あるみたいだけど……」

「手ごろな価格で出てくれるといいな……」

篠ノ之束へのささやかな（？）お仕置きから数日経った月曜日の朝、クラス的女子たちは個人のISスーツ選びのために机にカタログを広げて意見交換がされていた。

「そういえば、織斑君って特別にISアーマーを支給してもらったんだっけ？」

「前のへそ出しタイプもよかったけど、今回は何か特殊潜入工作員……って感じがしていいな……！！」

「俺もそう思ったよ。まあ、その代わり全身タイプだから常に下に

着ていないといけないけどな。」

もちろん、必要ないパーツは取り除いておりIS使用時に取り付けるようになってる。でないと、制服が凸凹して見えてしまうからだ。

「でも着ていた方が着ていないより遥かにメリットがあるんですから、いいじゃないですか。特に先日の一件みたいなことに巻き込まれた際には役立ちますし。」

「そうだな……しかし、本当に誰があんなISを寄越したんだろう?」

「せっかくの代表戦中止になっちゃったしね。」

「……夏姫はその犯人が篠ノ之束であることと詳しい情報を決して口外しなかった。下手に洩らせば必要のない戦いが巻き起こる可能性だってあるからだ。また、篝や一夏に話せばどうなるかは計り知れない。」

「諸君、おはよう。」

「おはようございます。」

『お、おはようございます!』

S H Rの時間になり千冬と真耶が入室すると一斉に全員が席に戻り
まるで軍隊並みの気を付けをした。流石、鬼教官・千冬の教師魂の
入ったありがたーいご指導のお陰だ。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機のISを使用して
の授業となるが各人気を引き締めるように。またISスーツは個人
用が届くまでは学園指定のものを使うので忘れるなよ。忘れた者
には学園指定の水着、それすら無い者は下着で構わんだろ。」

水着で授業って……そりゃないわ!!後、下着で授業とか
何処のドエロなエロゲだよ!?と内心ツッコむ夏姫。なぜかクラス
メイトの一部が『下着で授業……ソクソクするわっ!!』
『やだっ!!感じちゃう!!』『はあはあ……もう我慢できない
よお!!』なんて言っている声が微かに聞こえるが気にしない。『
夏姫様に苛めて欲しい!!』『一緒に寝て欲しい!!』とかも聞こ
え始めたが絶対に気にしないったら気にしない。

「では山田先生、ホームルームを頼む。」

「は、はい!!ええとですね……今日はなんと転校
生を紹介します!!しかも二人です!!」

「え、ええええええええっ!?!」

衝撃の事実クラス中の女子が一斉に騒つく。三度の飯より噂好き

の女子達特有の情報網を掻い潜って、いきなり転校生の告知なのだから驚きもするだろう。しかもなんと2人。

「ではどうぞ!」

「失礼します。」

「……………」

山田先生の声に合わせ教室に二人の転校生が入った瞬間、教室のざわめきが止まった。なんと教室に入ってきたのは、男子用の制服に身を包んだ金髪の男子とあからさまに軍服風へ改造された制服に身を包んだ銀髪で左目の眼帯をした女子だったのだから。

「シャルル・デュノアです、フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします。」

「お、男……?」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を——」

男子の転校生が自己紹介をしている中、夏姫は一人思考していた。

（おかしい……………一夏が篠ノ之束の関係者である以上、一夏

だけに反応するように細工を施したはずだ。なのに何の関係のなさ
そうな男子が起動させるなんて変だ、それに一夏の時のようにマス
コミが堂々と取り上げてもおかしくないのにそれすらなかったとは
……詳しく調べてみるか。)

おまけに『デュノア』ときた、これの意味するのはフランスのIS
会社であるデュノア社が何か企んでいるに違いないと仮定する。そ
んな内なる決意を胸に秘め思考を終えると周りには興奮して騒いでい
た。

「男子！！二人目！！」

「しかもうちのクラスよ！！」

「美形！！守ってあげたくなる系！！」

「地球……いや、日本に生まれて良かった！！」

……お前は何処の織。裕二だ？

そんなことより夏姫の視線はもう一人の……気配からして
軍人、それも強化人間らしき気配を漂わせた女子生徒へ向けられて
いた。

(この感覚……強化人間か？この世界にもそんな存在がい

るとは……特に左目は何か細工が施されてそうだな。」

ニュータイプの直感でラウラが彼女の知る強化人間、超兵などに近い存在であることを見破り、なおかつ眼帯の下の『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』の存在に夏姫は気付いた。

「……………」

ラウラは腕を組み、ただ目の前にいるクラスメイト達を見下した目で見遣った後その視線を織斑先生に向ける。

「……………挨拶しろ、ラウラ。」

「はい、教官。」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここでのお前は一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました。」

「（教官ねえ……………なるほど。）」

二人の会話から過去に千冬がドイツ軍で教官をやっていたという情報思い出す。その時の教え子がラウラなのだろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

それに続く言葉を女子たちは待っていたのだが、この軍人娘、何も語ることなどないというオーラを出していた。意を決して山田先生が恐る恐る尋ねる。

「あ、あの、以上・・・・・・・・ですか？」

「以上だ。」

山田先生、もう涙目である。・・・・・・・・このクラス、大丈夫か？先生をいじめすぎてないか？などと思っていた時、ふいに一夏とラウラの目が合う。

「！！貴様が――」

そして、彼に近付いていき平手打ちを一夏の頬に叩き込もうとしたのだが・・・・・・・・それは叶わなかった。なぜなら――

「——ほう、転校して早々クラスメイトに暴力とは……………
礼儀がなっていないな、小娘？」

一夏の頬に吸い込まれるはずだったラウラの平手を右脚で防ぎつつ、
ラウラの顔面すれすれにジユツと摩擦熱で溶けかけた靴底を置く一
組のロマンティック大統領……………もとい、二重人格なサディ
スティック女王こと織斑夏姫が止めたからだ。

「なっ……………貴様、邪魔をするな！」

不発に終わったことに腹を立てたのか今度は夏姫へ蹴りを飛ばすラ
ウラ。だが、それすらも避けられてしまい背後に回り込まれ左腕を
拘束されて教卓に押し付けられてしまう。

「却下だ、このクラスで暴力事件が起きるのを見たくはないのでな
」

「……………貴様、その動き……………軍人か！？」

「さあな？私はただ単に知り合いから学んだ格闘術で対処したまで
だ、それ以上それ以下もない。」

長い髪をかき上げ夏姫は堂々と告げた。それに嘘は言っていない。
ドモンや東方不敗などからは格闘術を、アスランからは狙撃のテク

ニツクを、キラからはプログラミングなどエトセトラ・・・学んだのは事実であり、今の夏姫に活かされているのだから。

とりあえずいつまでも拘束しているのは何なので放してやると、ラウラはキツと睨みつけながらこちらを向いて言った。

「貴様・・・・・・・・・名前は？」

「そうだな・・・・・・・・・お前がさつき殴ろうとした男とお前が教官と慕う女教師の義理の妹、織斑夏姫と名乗ればいいか、ラウラ・ボーデヴィツヒ？」

「義妹だと・・・・・・・・・聞いてないぞ！？」

ラウラは驚愕した顔で私を見る。どうやら千冬姉さんは弟がいることしか彼女に話していないようだ。・・・・・・・・・そんなの当たり前か、私は突然一か月前に現れた平行世界の住人であり、その正体や存在を必要以上に広めてはいないのだから。

「フン・・・・・・・・・まあいい、それよりも――」

再度一夏の方へ向いたラウラは睨みつけながら言い放った。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！！」

「……これは相当な憎しみを持っているな。どうしてそんなにまで一夏を目の敵にするのかは調べてみなければわからないが、早急に対処しなければまた大変な問題事になりかねない。そう思った夏姫は自身の席へと向かうラウラの耳にすれ違いざまに警告として言った。」

「お前を……殺す。」

「!？」

殺人予告とも思える言葉に一瞬振り向いたラウラだったが、席へ移動するため一旦後にした。

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

重たい空気が漂っていた教室の空気を換えるために千冬は号令をかける、一夏にシャルルの面倒を見るように指示して一夏達二人は第二アリーナの更衣室へと向かっていく。

そんなのを余所にラウラは一人、夏姫のこと思い返していた。

「何なんだ、織斑^{おまえ}夏姫は……!？」

彼女の問いに対する答えはまだ明かされなかった。

一夏達がギリギリのところまで授業に間に合い、整列の中に入るのを確認した千冬は授業を開始する。例によって夏姫はそこにはいない

が、遅刻でも欠席というわけでもない。

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

「まずは戦闘を実演してもらおう。————鳳！オルコット！専用機持ちならすぐに始められるだろう、前に出る。」

「一夏のせいなのに何でアタシが……………」

「まったくですわ……………」

不満をブツブツとぼやきながら前に出ていく二人。そんな二人にやる気を出させるためにも千冬は一夏を餌にやる気を出させる。すると……………」

「やはりここは、イギリス代表候補生、わたくしの出番ですわね！」

「私の実力を見せるいい機会よね！専用機持ちの……！」

はい、やる気全開の代表候補生の出来上がりとなります。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。それはこっちのセリフよ。返り討ちにしてあげるわ!!」

ただし、とても好戦的になりますのでご注意を……

「慌てるなバカども。対戦相手は——」

(キーン……………)

空気を裂く音が聞こえる。

「あああーっ!ど、どいてくださいっ!!」

「へ……………!?わ、わわ、ちよっ!?!」

声ができる方を見れば、山田先生が上空から一夏の下へと落ちてくる。このままでは直撃コースならぬ衝突コースに入りペったんこな一夏が出来上がるだろう。

「「一夏っ!!」」

「一夏さん!!」

箒、鈴、セシリアの声が重なったその時——それは飛来した。

「何、あのIS……！！？」

「すっごく速いよ！？」

「こっちに向かってくる！！」

目を疑うような驚きの速さで素早く真耶と一夏の間にそれは（……
）割り込むと真耶をお姫様抱っこで抱きかかえて滑るように着陸する。赤い鶏冠を持ち全身を白い装甲で包み込んだ白騎士とは違った騎士を思わせるそれは、ゆっくりと装甲を部分装甲モードへと変更し装着者の顔を露出させた。そう、夏姫である。

「ふう………なんとか、間に合ったようだな？」

「あ、あ、ありがとうございます、夏姫さん！！」

「助かったぜ夏姫、ありがとよ！！」

念のために白式を展開しておいた一夏はほっと胸を撫で下ろす。そして、ふと彼はいつもの夏姫と違う部分に気付く。いつもなら青いのはずの夏姫のISアーマーが黄色と黒を主としたものになっていたのだ。

「あれ・・・？確か夏姫のISアーマーって青いのじゃなかったか？」

「ん？ああ、これが・・・これは倉持技研のISを使う時用のISアーマーなんだ。下手にフェニックスのと同じのを使ってしまうと蓄積データがおかしくなるからな、使い分けているんだ。」

「へえー、そうなのか。なんかこっちはこっちで武人って感じがしていいな！！」

「お褒めの言葉をありがとう、一夏。・・・織斑先生、もうこちらは大丈夫なので授業の続きをどうぞ。」

「ああ、そうしよう・・・ご苦労、織斑妹。では、鳳・オルコットペアと山田先生・織斑妹ペアの実戦訓練の実演を開始する！！各員、準備しろ！！」

「え！？夏姫と戦うの！？」

「そうだ。それに言うておくが、山田先生は元代表候補生だ。舐めてかかると痛い目に遭うからな、覚悟しておけよ？」

「勝ち目、あるんでしょうか・・・？」

あるわけがなかった。

「山田先生、こちらで攪乱を行います！！支援射撃、お願いしますよ！！」

「わかりました、任せてくださいっ！！」

鈴とセシリアの下へ突っ込むようにして加速する夏姫。現時点では部分装甲モードなのでそこそこ高い機動力で、ドーバーガンを連射しセシリアのビット攻撃を潜り抜けていた。そんな彼女を背後から衝撃砲で狙おうとしていた鈴は真耶の支援攻撃に邪魔されチャンスを逃す。

「くっ、墜ちなさいよお！！」

「そう簡単に当たらんよっ！！」

すぐさま真耶に攻撃を仕掛けようとした鈴だったが夏姫の両刃型近接ブレードによる攻撃に阻まれる。そこへスターライトMk?のレーザー射撃が夏姫を狙って割り込み、二人を引き離すと一度夏姫は真耶の下へと後退する。

「さて、今の間なら良さそうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ。」

「あつ、はい。山田先生が使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェア持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多い事でも知られています」

「ああ、いったんそこまでいい。……あとは、織斑妹の使っているISについての解説だな。」

転校したてのシャルルとラウラの為に打鉄強化改修機の説明が再度行われる。

「（省略）……という具合だ。先日ロールアウトしたばかりの最新機だから使える機会はまだ少ないが性能は確かだ。何せ一号機は私が試験操縦を務めたからな。」

「一号機というと、近接格闘型ですか。では、夏姫さんが使用しているのは……………」

「三号機だ。高機動型で基本武装面は乏しいが機動性だけなら第三世代を凌ぐほどだ。……………それ、見てみる。壱型丙の本領が見られるぞ。」

千冬が指差した先には壱型丙を部分装甲から全身装甲へと切り替えた夏姫の姿があった。

「セシリア！！さっきのヤバイスピードのが来るわよっ！！」

「わかってますわ！！早急に対処しますわよっ！！」

先程の山田先生落下事件で壱型丙の恐ろしいまでの機動性を目撃した鈴は、攻撃に移させる前に叩こうと双天牙月を構え突撃する。同じくビットを使い鈴を援護しようとしたセシリアだったが……………
・既に遅かった。

「フツ・・・・・・・・・・バカは来る!!」

「「!？」」

顔は隠れてしまっで見ることができないが、彼女は確かに二人の行動を笑っていた。そして、背中のバーニアスラスターを広げると・・・・・・彼女は消えた。

「ええっ!？」

「消えたっ!？」

突然目の前から消えた夏姫の行方を探す二人。だが、その間に彼女は既にセシリアの背後に接近してビームサーベル片手に斬りつけていた。

「セシリア、後ろ!!」

「くっう・・・・・・・・・・また、いない!!」

別に赤くもなくトランザムもしてないのに三倍速い打鉄壱型丙は四方八方から次々と二人を斬りつけていき、攻撃を受けて怯んでいる所を真耶のライフルが撃ち抜いていく。その動きは今日初めてペアを組んだものとは思えないほどのものだった。

「山田先生、これで決めますよ!!」

「フォーメーションD、行きますっ!!」

「何をしようっていうの!？」

「動きが読めませんわ!!」

真耶は一人ライフルを使って鈴を牽制し始めると夏姫は遙か上空へと加速し移動していく。狙うはセシリア、彼女は剣も銃も使わずにただ叫ぶ。

「究^がウウウウウウウウウウ極ウウウウウウウウ!! 打^{うち}鉄^がエキイイイイイイイイイック!!!!!!」

雲を貫くようにして風を斬り裂き、セシリアへ激突する蹴り。進路
上には真耶のグレネードランチャーによって誘い込まれた鈴がおり、
二人は悲鳴を上げながら衝突した。

「・・・・・・・・ただ、蹴り破るのみっ!!」

「あなたのせいですわ!」

「あんたのせいよ!」

「ぐぐぐぐぐっ・・・・・・・・!!」

「きゅわんきゅわんっ・・・・・・・・!!」

無様に負けたセシリアと鈴はまるで怒れる猫と犬のようにお互いを貶しあっていた。そんな二人の姿に勝者の山田先生はそわそわする。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように。」

もつとも、日頃のドジでいつものようにされてしまっただろうが。

「次に、グループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやる事、では分かれる！」

専用機持ちである一夏、夏姫、セシリア、鈴、シャルル、ラウラ、の計6人の下に分かれた女子。しかし、好印象を持たれなかったラウラだけ誰も来ないで独りぼっちだった。

「馬鹿者、好き勝手に分かれるんじゃない。何人かはボーデヴィツヒのグループに移動しろ、いいな？」

千冬による注意で渋々と移動する数名の女子たち。……かわいそうに。

一夏と鈴、そして夏姫の所へ打鉄（ただし、夏姫の所は数が足りなかったため壱型乙　ヘイズル改　が急遽配給された）、ラウラとセシリア、シャルルのグループにはデュノア社製のラファール・リヴ

アイヴが配給された。

「まずは歩行練習から始めるぞ？間違っても武装は呼び出したりするんじゃないぞ。」

その後、ラウラの班が遅れたりしたり、一夏が箒をお姫様抱っこしたりとハプニングがあったりしたものの特にこれといった問題は起こらず授業は終わった。

午前中の授業が一通り終わると、いつの間にか箒と昼食の約束をしていた一夏に連れられて夏姫はいつものメンバー＋シャルルと共に屋上にいた。箒がとても不機嫌なのはてっきり一夏と二人きりだと思ったかららしいが……。せつかく一夏のお弁当を作ったというのに、ご愁傷様。まあ、転校したてのシャルルを気遣った一夏の行動なのだから許してやってくれ。

「はい一夏。アンタの分」

そう言つてタツパーを放る鈴。こらこら、食べ物を投げるんじゃないやありません。

「おお、酢豚だ！」

一夏……興奮するのはいいがお前も注意しな。多分一夏の言葉なら聞くかもしれないから。

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言つてたでしょ？」

鈴は要領良く自分用のごはんを食堂から買つて来ていた。

「コホンコホン。——一夏さんわたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみました。よろしければおひとつどうぞ。」

「え……これ、今度は味見したのセシリアさん？」

見た目は綺麗なサンドウィッチだが前回食べた夏姫と一夏は同時に気絶し、時が見えたというほどの破壊力を持っていた。そのせいで今度は大丈夫なのだろうかと体が震えている。

「だ、だ、大丈夫ですわよ！！今度はちゃんとチェルシーに見てもらいましたし！！」

「そ、そ、それなら大丈夫か・・・・・・じゃあ、一つ貰うぜ？」

かつてのトラウマを引きずり小刻みに震える一夏の右手はサンドウイッチを掴み、口へと運んだ。

「どう・・・・・・？一夏兄さん・・・・・・。」

「・・・・・・。」

「え、ノーコメント？」

「また気絶しているんじゃないでしょうね！？」

「AEDスタンバッておけよ！！」

「何なの、この空気・・・・・・？」

高々、サンドウィッチでここまでの大混乱。前回のセシリアの料理がいかに悲劇的だったかがよくわかる構図である。そして、また気絶したんじゃないかと疑われていた一夏が呟いた。

「・・・・・・普通だな。」

「え、普通？」

「マジで!？」

「ああ、不味くはないが……う・ま・い・ぞーーーーー
——っ!——って感じでもない。普通の旨さだ。」

一夏大先生の評価コメントが出されました、ギリギリ合格点らしいですよセシリアさん。ついでに夏姫も一つ掴み頼張る。

「……これは、普通だ。」

ここまで普通の味を味わったことはない。微妙な空気になってしまったよ、おかげで。

「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

一夏の隣に座っていたシャルルが心配そうに言う。

「転校したてなんだから別に遠慮しなくていいぜ？」

「そうですね、クラス代表がそう言っんですから頼ってあげて下さい。——IS以外で。」

まだまだそれに関しましては素人ですからね、一夏は……………

「一夏はもうちょっと勉強しなさいよ。」

「してるって……多すぎるんだよ、覚えることが。お前らは入学前から予習してるからわかるだけだろが……………」

「ええまあ、適性検査を受けた時期にもよりますが、遅くてもみんなジュニアスクールのうちに専門の学習をはじめますわね。」

「流石にISに関わってまだ数ヶ月の一夏兄さんにすべて覚えろっていうのは酷じゃないでしょうか？」

IS攻略本でもなければすぐに覚えられるなんてことはできやしないだろう。

「ありがとう。一夏って優しいね。」

優しい笑みでそう返すシャルル。そして、弁当の話題は夏姫の弁当へと移っていった。

「これは……………確か、ドネル・ケバブだったっけか？」

「珍しいわね、それって中東の料理でしょ。」

「随分とコアな料理ですわね。」

夏姫の持っていたタッパーから取り出されたそれは、少し焼き色がついた白い生地に包まれた肉と野菜、そして白いソースと橙色のソースの入った器だった。

「そうですね。昔の知り合いのバルドフェルドさんって方が教えてくれて久しぶりに作ってみたんですが、一ついりますか？」

「おう、ソースはおすすめとかあるか？二種類あるみたいだけど。」

「普通の方はチリソースですかね。通な方ならヨーグルトソースをよく好みますが。」

ちなみに夏姫はヨーグルトソース派である。別にバルドフェルドに強要されたからではない、純粋な個人の好みだ。

他の皆の分も用意しておいたため、箒が一夏の弁当を渡す中で分けておいた。

それぞれが弁当を堪能していると箒が作った唐揚げを一夏が箒に食べさせようとしていた。それを見たシャルルは・・・

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、

あーん』っていうやつなのかな？仲睦まじいね。」

シャルルはそんなこと言って納得したように微笑む。

鈴とセシリアが箒に嫉妬して酢豚やサンドウィッチを進める中、ソースの汚れを拭き、ズズーツと水筒のお茶を飲む夏姫であった。

歪みを抱えた転校生（後書き）

明日と明後日は面接、そして来週までにレポートを書かないといけない。

ああ、忙しい。

親ならば人生を子の為に賭けるb y夏姫（前書き）

何とか面接を終えた・・・・・・・・

あとは明日の面接だけか・・・・・・・・

よし、適当にやろう!!

親ならば人生を子の為に賭けるby夏姫

一夏の部屋替えが行われ、箒とシャルルが入れ替わってから五日目の土曜日。

恒例になり始めたいつものメンバーとのISの模擬戦を午後の自由時間……つまりはアリーナ全解放を利用して行っていた。箒・鈴・セシリアの三人の意味不明の説明をスルーし、現在一夏は白式の開発者の一人である夏姫のレクチャーをシャルルと共に受けている。

「先日も言った通り、ビームアローはあくまで迎撃用の射撃武装と考えていいです。速射性こそいいですが威力と命中率は並みなので、的確にダメージを与えるにはまず射撃訓練をした方がいいですね。」

「ライフルじゃなくてシールドに内蔵されているのはそういう意味なんだね。」

「いつも弾幕代わりに使ってるけど、それ以外の使い方を練習した方がいいってことか。」

白式をより良く使いこなすためにも説明を聞き逃さない一夏と白式の武装に興味津々のシャルルは熱心に夏姫の話を聞いていた。

「そつえば、一夏の白式って後付武装がないの？」

「ああ、後付武装はないらしいけど後付装備オプション・パーツっていうのはあるらしいな。」

「後付装備オプション・パーツ？聞いたことないけど、どういふものなの？」

聞きなれない単語に首を傾げたシャルルは気になって夏姫に尋ねる。

「後付装備オプション・パーツというのは、戦闘用の装備・・・武器のことではなくて、ISの性能を高めるための言わば補助システムの事なんですよ。最大3つまで装備可能で、今の白式には『ロウ特製パーツ』『バイオ・センサー』『シエルフノズル』というシールドエネルギー消費を抑えるパーツと反応値などを高めるためのパーツと機動力強化のためのパーツが装備されています。」

「他にも種類はあるの？」

「はい、そうですが、具体的な数は企業秘密なので教えることができません。ごめんなさい。」

「別にいいよ、ここまで解説してもらったんだし。」

話に一段落ついたところで予定の射撃練習を行うことにすると、シャルルは練習用に五五口径アサルトライフル『ヴェント』を手渡した。

「あれ？他の機体の武装って使用出来ないんじゃないかなかったっけ？」

「所有者が使用許諾出したら使えるんだよ。今、一夏と白式に使用許諾を発行したから撃ってみて。」

シャルルに指示に従い射撃姿勢を取りつつメニューを開き射撃武装とのリンクを行わせようとするのだが、エラーが何故が発生した。

「うーん？　どういう事だ、使えないぞ？」

「あれえ、おかしいな……普通は使えるはずなのに。」

二人が疑問に思っていると打鉄改修機の使用許可についての説明のために少しの間離れていた夏姫が戻って来た。

「ん？　どうしたんだ、二人とも……」

「ああ、ちょうど良いところに……実はな、シャルルが貸してくれた『ヴェント』を白式が使えないんだよ。」

「ビームアローのメニューは開けるんだけど……」

「ああーそれか。言い忘れていたな、すまない。残念だが白式は専用の射撃武装でしか射撃が行えないんだ。どうも現代の射撃武装を嫌っているらしくてな……」

「え、ISが武装を嫌ってる？　そんなことがあるのか？」

「普通はそんなこと起こらないはずだよ、おかしいよ。」

まあ、理由はただのコアじゃないからなんだがな。それを言うわけにもいかなないので適当にごまかす。

「とにかくだ、どうしても使いたいのなら目測で行うしかない。」

「うーん、なら目測でやるしかないね。」

シャルルが納得すると一夏の射撃の補助体勢をとり、一夏に射撃を開始させた。

「うおっ！？速い！！」

反動で後ずさるとシャルルが支えるようにして助ける。

「反動に負けないようにもう少し踏ん張った方がいいね、イメージ的には固定砲台かな？」

「固定砲台・・・・・・・・嫌なものを思い出すな。」

ジェネレーションシステムにあったガーダーシリーズを思い出す夏

姫。特にビツクなあれは近くで見た者にとってはトラウマものである。

シャルルの手助けの下、ターゲットを狙い撃った一夏だったが、どれも中心を射抜くことはなく僅かにずれていた。

「それにしてもシャルルのISってラファールとは違うように見えるけど同じ機体なのか？」

『ラファール』……正式名称『ラファール・リヴァイヴ』は『疾風の再誕』の意を持つデュノア社製フランスの最後発第二世代型ISだ。山田先生が先日使用した機体がまさにそれであり、第三世代機にも匹敵する高い性能や操縦の簡易性による汎用性が売りの世界シェア第三位のISである。

しかし、本来のラファール・リヴァイヴはネイビーカラーに四枚の多方向加速推進翼が特徴的なシルエツトをしているのだが、シャルルの使用しているのはオレンジ色で多方向加速推進翼が背中に背負った一对と中央部分から二つに分かれるようになっており、機動性と加速性が強化されている。また、アーマーも従来のもものより小さくシェイプアップされている。そして何より違うのは本来四枚付いているはずの物理シールドは全て取り外されおり、代わりに左腕にシールドと一体化した腕部装甲が取り付けられている。逆に右腕は射撃の邪魔にならないようにスキナーマーのみである。

「ああ、僕のは専用機だからかなりいいってあるよ。正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。基本装備を

いくつか外して、その上で拡張領域を倍にしてあるんだ。」

「倍にか！？・・・すげえな、ちょっと分けて欲しいくらいだ。」

「あはは。あげられたらいいんだけどね。そんなカスタム機だから量子変換してある装備を数えただけでも二十以上はあるよ。」

「へー、まるで火薬庫だな。」

「私のISも一夏と同じようなものだからな、羨ましい限りだ。」

何時しか内容も世間話になっていき、笑いあっていると途端に辺りが騒がしくなる。

「ねえ、あれって・・・」

「嘘っ・・・ドイツの第三世代型よ。」

「まだ本国でトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

周囲が騒ぐ元凶になっている存在に視線を移すと、そこには・・・

「・・・」

もう一人の転校生こと、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒ（少佐らしいね）が漆黒のIS……シュヴァルツェア・レーゲンを展開してこっちを向いて見つめていた。

「おい」

「……………なんだよ」

ISの開放回線で声が飛んでくる。夏姫のせいでもあるが、初対面で強烈なインパクトを与えたので一夏は覚えていた。

「貴様も専用機持ちだそうな。ならば話が早い。私と戦え」

「嫌だね、理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

ラウラは千冬が棄権せざる負えなかった第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦の事を引きずっているのだ。唯一の家族である弟の危機に駆けつけない姉などいないので、千冬はドイツ軍協力の下『亡国企業』に誘拐された一夏を取り戻しに向かった。その行動を夏姫は正しいと思っているが、ラウラのように千冬を尊敬しすぎる者の中には弟に構わずに出場すべきだったと考える人もいるのだ。

「貴様がいなければ教官の大会二連覇という偉業が成し遂げられたのは容易に想像出来る。故に私は貴様の存在を許さない」

「……存在を許さないねえ、つまり殺すってことなのかな？
この、IS学園で。」

「また今度な」

「ふん。ならば戦わざるを得ないようにしてやる！」

刹那、ラウラのISに装備された左肩の大型実弾砲が火を噴いた。

「なっ！」

「まっがぐれ←」

カッキ――ン!!!!!!!!

ジャキ!!

ガシャン!!

横合いから割り込んできた夏姫がホームランを打つようにして近くにあった近接ブレードで実弾を撥ね返すとシャルルが右腕に六口径アサルトカノン『ガルド』を展開してラウラに向ける。そして撥ね返された実弾がラウラの背後で落下した。

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようだなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「これで軍人を名乗るとは………アンドレイの風上にも置けないな。」

ELSが地球に接近した時に自爆することで地球を守った彼は最後に「私は市民を守る連邦軍の軍人だ!!!!」と言って死んだ。父と母の思いを受け継いだ彼の勇姿こそ軍人のあるべき姿だと私は考えている。なのにラウラときたら……力こそ正義だと考えている。

「貴様ら……………」

いとも簡単に攻撃を防がれ、反撃に出ようとする二人を睨みつける
ラウラ。

「フランスの第2世代型ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の用途が立たないドイツの第3世代型よりは動ける
だろうからね」

「量産型は伊達ではないことを教えてやろうか、ああん!？」

「夏姫……キャラが変わってるぞ。」

変わってなどいない、キレているだけだ。

『その生徒、何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え!』

突然アリーナのスピーカーから担当の先生の怒号が飛ぶ。騒ぎを聞きつけたのだろう。

「……ふん、今日は引く」

二度も邪魔をされて興が削がれたのかラウラはあっさりとゲートへ去っていった。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったぜ」

心配したシャルルが夏姫と共に駆け寄ってくる。

「またつまらんものを打ってしまった……」

「何で某怪盗三世の一味なんだよ……というか、凄いな夏姫。近接ブレード一本で打ち返すなんて、どんなパワーだよ？」

「ハンドパワー」

「違うでしょ」

「眼力」

「明らかに手で出してましたわ」

「引力」

「関係ないだろう」

「長。力」

「格闘家じゃないか、それ」

「消。力」

「それって臭いを消すことだけしかできないはずだけど……」

「リト。バスターズ！」

「それは理樹^{じき}違いだっ――！」

しょうがないので火事場の馬鹿力と気合ということ。

「えっとじゃあ……先に着替えて戻って」

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれないことを言うなよ」

どうやら、シャルルはいつも一夏を避けて着替えようとするらしい。
……ははん、なるほど。

「一夏、本人が嫌がっているんだからやめておけ」

「ぐほっ!？」

あ、やべ、勢い余って背負い投げしてしまった。まあ、受け身を取ったみたいだから大丈夫だとは思っけど。

「何すんだよ!？」

「すまん。つい、やつちゃったんだ」

「つい、で背負い投げする奴がいるか!！」

ここにいますが、何か？

「とにかく、とっとと着替えに行ってくれ。白式の登録手続きがあるからな」

「……………はいはい、わかったよ」

少しショボンとして、一夏は更衣室へと向かった。

「はー、終わった終わった」

「お疲れ様でした、兄さん」

白式の登録手続きを夏姫と協力して済ませた一夏は自室へと着き、今度は白式の今週のステータス確認を行うために作業へ移る。

「しかし、毎週これやってるけど意味あるのか？」

「ありますよ。人間に健康診断があるようにISにも体調みたいなものがあるんです。」

二人が今行っているのは、今週の模擬戦の戦闘データによる白式の被弾率及び消耗率の確認だ。これを毎週行うことによりISのスペックを調整し最適化を図ることができるのである。

「あつ、そういえばシャルルがボディークリームが切れてたって言うてたな。新しいのを出してやらないと……………」

「そうですか、じゃあもう少しなのでこちらで終わらせておきますね」

「おう、サンキュ」

一夏はクローゼットから予備のボディークリームを出し、シャワー室と隣接する脱衣所兼洗面所へと入っていく。すると……………」

『ああ、ちょうどよかった。これ、替えの———』

『い、い、いち……………か……………?』

『へ……………?』

シャルルと一夏の驚くような声が聞こえた。……………む、時が来たか。

『え、えつとだな。えーつと……………』

『きゃあっ!?!』

はい、シャルル」女子が確定しました。でも、まだ……まだ、動かんよ!!

『あー、えーと……………』

『……………』

『ぼ、ボディーソープ、ここに置いとくから……………』

そう言つて脱衣所から撤退する一夏。ギギギ……ときこちない感じでこちらを向いてきた。

「どうした一夏、まるで『二人目の男子だと思っていたルームメイトとシャワー室で出くわしたら実は女子でした。』みたいな様子だが……………」

「まさに……………そうだったよ。ていうか、気付いていたのか!?!」

「うん、なんとなく。確証はさつき得たけど」

「ああ……………裸見ちまったよ、どうしよう……………」

裸を見たのに喜ばないのが一夏クオリティ。……………だが、これだけは言わせてもらおう!!（シャア風に）

「その……実家のデュノア社の方からそうしろと言われたんだ。社長……つまり父からの命令でね」

「命令って……親だろう？どうしてそんな……」

「考えられるのは一つしかあるまい。血の繋がりにあるのにシャルルが娘として扱われていない理由それは……」

愛人の娘だからだろう、と静かに夏姫は告げた。答えることが辛いであろうシャルルの気持ちを考慮して。

「……うん、その通りなんだよ一夏」

「そんな……」

絶句する一夏は気持ちを切り替え、シャルルの話を真摯に聞くことにした。

「二年前、母さんが亡くなった時に父の部下がやってきて引き取られたんだ。色々と検査する過程でIS適性が高いことが解って、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになったんだ。」

「父に会ったのは二回ぐらいで会話は数回ぐらい。本妻の人には一度だけ会ったけど、『泥棒猫の娘が！』って殴られたんだ。母さん

もちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったんだ」

話したくない内容を健気にも話すシャルル。そんな彼女の話の中にあった疑問点に一夏は注目した。

「え？デュノア社は量産機ISの世界シェア第三位だろ？」

「・・・・・・『イグニツション・プラン』か、なるほど」

その意味を理解した夏姫が口を開いた。一夏はセシリアから以前に聞いたヨーロッパの第三世代機開発計画について思い出す。

『現在、欧州連合では第三次統合防衛計画『イグニツション・プラン』では次期主力機の選定中なのですわ。今のところトライアルに参加しているのは我がイギリスのティアーズ型^{モデル}、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型。今のところは実用化ではイギリスが一步リードしていますが、まだまだ難しい状況なのです。ですから実稼働データを採る為に私がIS学園におくられましたの』

という内容だったはず。ラウラが転校して来たのもそれが関係しているのだろう。

「フランスは統合防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されていてね、第三世代機の開発は急務だったの。デュノア社でも第三世代機の開発をしていたんだけどラファールは第二世代機最後発

でデータも時間も圧倒的に不足していて中々形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、IS開発許可も剥奪されることになったの」

「何となくの流れは分かったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びる為の広告塔。それと――」

「男としてならば織斑一夏及びその使用機体のデータを手に入れ……いや、盗み出すことが出来るか？」

「その通りだよ、夏姫。一夏と白式のデータを盗んでこいと言われているんだよ。あの人にね……」

「……………（ギリリッ！！）」

一夏が拳を固く握りしめる音が聞こえる。同じように自分も無意識的ではあるがキレていた。

結局、シャルルの父親は自分の会社のための道具としてしか見ていないだと理解できたから。

「まあ、こんなところかな。でも二人にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるかな。デュノア社は潰れるか他社の傘下に入るか、僕にとってはどうでもいいことかな。はあ、話したら何か楽になったよ。聞いてくれて有難う。そして、今まで嘘ついていてゴ

メン」

「いいのか、それで!!」

「え……?」

突然、一夏がシャルルの肩を掴んで顔を上げさせていた。怒りが臨界点を超えて抑えきれなくなったようだ。

「それでいいのか? いいはずがないだろ!! いくら親でも子供の自由を奪う権利があるわけない!! 親がいなけりや子供は生まれないそりやそうだろうよ。でも、だからって、親が子供を何したつていいなんて、そんな馬鹿なことがあるか! 生き方を選ぶ権利は誰にだつてある!! 親なんかに邪魔されるいわれなんてない!!」

「……全くその通りだ、子供の人生を奪う親はもはや親とは呼べん存在だな。」

「ど、どうしたの一夏、夏姫?」

「すまん、熱くなり過ぎた。………実は俺は、俺と千冬姉は両親に捨てられたんだ。でも俺の家族は千冬姉だけだし、別に今更両親に会いたいとも思わない」

「私は………まだ良い方だ、親は事故死して私はたった一人の兄に育てられた………だが、兄とは二度と会うことができない」

「え・・・・・・・・そうだったのか夏姫？」

「ああ、詳しい経緯はさすがに語れないがそれが原因で私は千冬姉さんに引き取られたということさ」

「・・・・・・・・もつとも会えない理由が『平行世界だから』なんて言えやしないが。」

「・・・・・・・・そう。ゴメンね」

「気にすんなよ」

「こちらが勝手に話しただけだからな」

とにかく本題のシャルルのその後をどうするかを決めなければならぬ。

「シャルルはこれからどうするんだ？」

「どうって・・・・・・・・もう時間の問題だよ。フランス政府も事の真相を知ったら黙ってないだろうから代表候補生をおろされてよくて牢屋行きじゃないかな」

「それでいいのかよ!？」

「言っても悪いもないんだよ。僕に選択する権利なんてないから、仕

方ないよ」

もう諦めて捕まるのを待つよという雰囲気を出すシャルルの姿を見た夏姫は静かに口を開いて言った。

「一夏、特記事項第二一を思い出せ」

「え？特記事項第二一か？……ああ、そうか！！それがあった！！」

「い、一夏？話が見えないんだけど」

「特記事項第二一、本学園に於ける生徒はその在学中に於いてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

入学前に一夏に暗記させていた内容が今ここで活かされるとは思いもしなかったが、そのおかげで一人の人生を守ることができる。

「つまり、この学園にいる限りはデュノア社の干渉を受けることなく三年間は通うことができる。それだけ時間があればなんとかなる方法だって見つけれられるだろう？」

「……一夏、よく覚えていたね。特記事項って五十五個もあるのに」

「勤勉なんだよ俺は………というか夏姫のもう特訓のおかげで覚えていられたんだけどな。とにかく、三年間は大丈夫だ。何があろうと俺たちが守ってやるから安心しろ!!」

幼い頃から守られてばかりだった一夏にとって、今回の件を自身
が知った以上守り通さねばならないと考えた。どんなことだろうと
してやろうと考えた。

「ありがとう、一夏、夏姫」

彼女の瞳から嬉し涙が一筋こぼれた。

「……………」という訳なんで協力してくれませんか？織斑先

生」

「話は大体分かったが……協力って、一体何をするつもりだ、夏姫」

とりあえずシャルルの裸を見た罰ともろもろの理由で食事を食べさせたり、一緒に布団で抱き合って寝ることになった一夏の部屋を後にした夏姫は千冬を作業室へと呼び出し事情を説明していた。

「なあに、『娘を娘と思わず、自分の利益のための道具にしているクソ野郎』におはなし対話しに行くだけですよ？」

「OHANASHIって……お前」

「そんでもって、今回のデュノア社強襲作戦に使うISですが……」

「スルーするな。そして、さらりと凄いを言っな」

「……………。」

「急に黙るな……続ける」

「では。さあ、こちらをご覧あれ！！私、自家製コアを使って造り上げたIS、その名も……………『ビギナ・ロナ』！！そして、『テストメントガンダム（マガノイクタチストライカー装備）』……………！！」

スポットライトに光が灯るとそこには二機のISが鎮座していた。一つは貴族風の騎士のようなフォルムが特徴的であり、背中にはシヨットランサーを7連装式にしたバスターランサーが備え付けられている。もう一機はV字アンテナのほかに前方に突き出したようなアンテナを持ったガンダムタイプのISだった。どちらも全身装甲に近い仕様になっている。

「私のISはこちらの七つの剣ランサーを持った方か？」

「ええ、近接格闘に強いですしなおかつ射撃戦も十分行えるISですから最適でしょう？」

「それでお前は……先程『○○ストライカー』と言っていたが」

「ああ、それですか？それは今回の対話おはなしが上手くいったら売り込む予定の装備ですよ。」

ちなみにステルス性、ジャミング性、トリッキー性などを計算した結果テストメントガンダムが選ばれたのである。あとミラージュコロイドがマガノイクタチストライカーを装備時、使用できるようにしたのもあったりする。

「なるほど……それで一気に事を解決してしまうということか」

「大正解です。彼女の問題も会社の問題も親子の問題もゼー――
――んぶ――んぶ――解決できちゃいますから」

「……………えげつないな、お前」

「まあ、全ては私たちではなく彼女の父親が娘に『自身の人生を賭ける』ことができるかどうか懸かっているんですけどね」

「一応は血の繋がった親なのだから少しぐらいは残っているであろう良心に期待したい。」

「そうだな……………では、行くとするか」

千冬と夏姫はISを互いに装着すると作業室から忽然と姿を消し、星の煌めく夜空へと舞い上がった。

親ならば人生を子の為に賭けるb y夏姫（後書き）

次回、オリジナル回になりそうです。

バトルシーン、うまく書けるかな？

次回の・・・

デュノア社、強襲　　く私と契約してISV計画に参加してよー！！く

をお楽しみにく

デュノア社、強襲　　私と契約してISSV計画に参加してよー！ー！　　（前書き）

なんか、ごめんなさい。

こんな内容ですみません。

デュノア社、強襲　　く私と契約してISV計画に参加してよ！ーく

――デュノア社、そこはフランスに存在するIS企業の名である。

何処かの唐変木が男装女子を慰めるために食事を与えたり、添い寝をしてあげている頃にそれ（・・）は起きていた。

本来は会社を警備しているはずのISの登場によって職を失った男達の姿がそこにはなかったのだ。

――否、ただ地に伏しているだけである・・・・・・・・大
量の血を流して。

「クスクスクスクスクス・・・・・・・・」

少女は晒う、ISを解除され大木へ追い込まれた、まだ若い女性へ向かって。

「ひい・・・・・・・・く、くないでえ・・・・・・・・」

「フフフ・・・・・・・・」

震える声で話す女性へ向かってコツコツと音をたてて近寄っていく。

「い、いや……………こ、殺さないでえ！！お願いだからあ——」

迫り来る死への恐怖に命乞いをする女性だが少女は止まることなく近づいて屈み込むと、同性でさえも魅了するような笑みで覗き込むように女性を見つめる。

……………いや、見つめるだけではない。クンクンと体中を嗅ぎ、あまつさえ耳に舌を這わせた。

「ひあ……………やめて……………そこは……………ああん——」

あまりの快感に女性は声を漏らす。少女はその姿を見えますます微笑み、そして耳元でそつと囁いた。

「——」

その単語を囁かれた瞬間、女性から血飛沫が飛び出し気絶する。

頭部への衝撃にうづくまる少女……織斑夏姫は、せつかくのヤンマーニタイムを邪魔した世界最強の女性こと織斑千冬の方へと振り向く。

二人はミラージュコロイドとハッキング機能を駆使してフランスのデユノア社へと侵入していた。もちろん二手に分かれそれぞれ警備隊を片づけてきたのだが。

「何するんですかーーーーー！？今いいところだったのに！！」

「どこがいいところだ！？お前はここにこんな下らないことをしに来たのか！！」

地面に倒れ付す男性達＋さっきの女性を指差す千冬。そこには確かに血まみれの地面があるのだが、出所が問題である。……そう、鼻なのだ。

「いや、最近、欲求不満でムラムラするんですよ。ですので先日の例の写真を加工して見せたり、女性を襲ってみました」

「お前・・・・・・・・百合なのか!？」

「いえ、男性も好きですよ？ただどちらもイケるというクチですが・・・・・・・・」

「お前の好みなんてどうでもいい、さっさと行くぞ。私は帰って早く寝たいんだ」

「はいはい、わかりましたよ」

仕方なくその場を後にする二人だったが・・・・・・・・

この後が大変でした。（社員さん達が）

「昇天バイブレーション！！！！！！」

[illegible]

「えええっ！？ユリアがやられた！？早っ！！」

「次は貴様だ！！石破百合百合天驚おおおおお拳！！！！」

「なんか全裸の女性が腕組んで来るうううううううううううううう！！！」

「怯まないの！！迎撃しなさいよって．．．きゃああああああああああああああ！！！！！！」

後ろに回り込まれた拳句、テストメントガンダムのハッキング能力によってISを解除されスーツ越しに胸を揉みつくされたり・・・

「どーですか、どーですか!!!」

「きゃああああああああああああああ！？変態！！近寄らないで！！！！」

「とおっ！！」

「何で後ろにいるの！？触らないでよおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

なんでもどんとこいな某教授のホログラムにビビらされたり・・・

「脱げビイイイイイイイイイイイイイイイイムウ！！！！」

「ISスーツが消された！？って、私裸！？聞いてないよぉ」

脱げ女の伝説を作った某天才中学生のロボットの武装でISスーツを排除し全裸にしたりと社長室に着くまで阿鼻叫喚が続いた。気付けば廊下はおそらく、いや絶対にモザイクが入るであろう18禁空間へと変貌を遂げていた。

「うわぁ・・・・・・自分でやってて思うけどここまで酷いとは・・・」

「なら最初からやめろ！！・・・・・・どうやら着いたみたいだぞ、ここが社長室だ」

淫臭漂う廊下を背にして二人は目的地の部屋の前へと辿り着く。・・・

・・・いかにいかに、興奮しすぎて体が火照ってきた。

「で、どうする？中にはISで武装した二人と社長の反応があるが・

「どうするもこうするありません、正面突破しましょう」

「
・
・
・
・
・
・
正気か？」

「至つて正氣です。それに私たちは社員に手は出しましたが建物に手は出していませんし、ここで下手に窓でも壊して入ったら弁償だの何だの言われるじゃないですか」

「私たちじゃないだろ、お前だけだろ」

細かいことはいんですよ、細かいことは！！では、行きましょうか………

部屋のドアを開く、すると……

[illegible]

「そおい!!」

「フン!!」

いきなり撃ってきました。もちろん『ヴェント』で。

まあ、VPS装甲がある私とチョバム・アーマーを装備した千冬姉さんの敵ではないのですがね。というか、避けたし。あと面倒臭いのでハッキングして二人組のISを解除してあげた。

「え!?!何でISが解除されてるの、リゼファイア!?!」

「知らないわよ!?!」

……おおう、驚いてる驚いてる。

「無駄な抵抗はやめて降参しろ、命までは奪わないしコアも奪いに来たわけじゃない」

「何?!?!ならどうしてこの会社に侵入したのだ!?!」

なんか怒鳴ってきた男性が一名。つまりはこいつがシャルル……

・いや、シャルロットの父親ってことね。

「何故って・・・ちよつとしたニュースを届けに来ただけなんだが」

「・・・ニュースだと？」

「ああ、ニュースだ。この会社を潰してしまうであろうニュースだな」

「潰れるってどういうことよ!？」

先程リーゼフィアと呼ばれた女性が驚いて尋ねる。

「なに、その社長がIS学園に送り込んだ『男装させて、男として転入させた自分の娘』の性別が今、世界で有名な織斑一夏にバレたというだけさ」

「男装させた娘・・・?」

「どういうことですか社長!!あの子は普通にIS学園に入学したんじゃないかったですか!？」

どうやら彼女達はシャルロットが性別を偽ってIS学園に入学したことを知らないようだ。肝心の父親も驚愕故に口をあんぐりと開けている。

「そんな・・・準備は完璧だったはずだ・・・なのにたった数日でバレただと？」

「答えてください！！何であの子を男として入学させたんですか！？」

「社長！！」

社員に問い詰められた父親は椅子から立ち上がって机を叩きつけながらこう答えた。

「仕方がなかったんだっ！！イグニッション・プランから除外されたこの会社を運営するには早急に特異ケースの織斑一夏のＩＳデータが必要だったんだ！！でなければ、貴重なコアは没収されＩＳさえ造らなくなってしまうのだからな！！」

「だからってあの子を使ってまですることではないでしょう！？あの子はあなたにとってただの道具なんですか！！」

「方法は考えればいくらでもあったでしょう！？」

「そうだな、いくらでもあったはずだ。なのにあなた達の社長は娘を・・・愛人の娘だからといって道具として使ったんだ！！」

「嘘・・・愛人の娘って・・・」

「そんな話聞いていないですよ、社長！！」

シャルロットが愛人の子であることさえ知らなかったようだ。まあ、当たり前と言えば当たり前だが。

「もはや性別がバレてしまった以上、第三世代の開発は不可能になった……この会社は終わるのも時間の問題か……」

「私たちはどうすればいいんですか！？路頭を迷えって言うんですか！！」

「ああ……言いたくはないが、そういう事になる『この馬鹿者があああああああ！！！！』……グハツ！？」

「え！？」

「へ！？」

気が付けばシャルロットの父親を殴りつけていた。千冬さえもさつきから黙っていてくれたが、拳を握りしめて殴ろうとしていたのがよくわかった。

「な、何をするっ！？」

「何がそういう事になるだ！？そんなことだから貴様は自分の家族を利益のためにしか利用できないんだ！！会社が潰れるのも当然の事だろうな！！」

「何だと!!」

「じゃあ、答えてみる!! シャルロットに貴様が何をしたかを!! 私はあるぞ、貴様の本妻が『泥棒猫の娘がつ!!』と言って殴ったとなあ!!」

「え、それどこの昼ドラよ……」

「普通そんなことやらないでしょう……」

その通り、普通ならやらない。子供のせいではないのだから。それにそもそも、愛人を作ったこのバカ社長がいけないのだ。

「結局貴様が家族の事を一切考えていないからこうなったんだ!! 家族をろくに愛せない男が会社の社長なんてするんじゃない!!」

「………ツ!!」

家族と社員はいわば同じような存在だ、それ故に家族への愛情がなければ会社など上手くいくはずがない。しかし、それにもわからず目の前の男は利益を求め続けていたのだ。………ようやく気付いたようで今はもう自暴自棄になっているが。

「………どうしても会社を続けたいのならば、貴様の

人生ぐらい子供の為に賭けてみる！！！！」

「！？」

「貴様がそうするのであれば救ってやつてもいいんだ！！なのに何で貴様はここで諦めているんだ！？貴様が諦めたらシャルロットは社員たちはどうなる！！」

「し、しかし！！そう簡単いく訳が……………」

「ところがぎつちゃん！！……………すぐに片が付く」

「え！？本当なの！！」

「詳しく教えて欲しいのだけれど……………」

だが、教える前にどうしてもやって貰わないといけないことがある。シャルロットとの関係の改善の為に財産分与をすることと会社の後継者に含めることを約束し、今後一切の暴行と取れる行為を二度としないようにすることだ。その旨が書かれた書類を提示しサインをさせると再び向き直る。

「あらかじめ言うておくがこれが破られた際には地図上からデユノア社を痕跡残らず排除するつもりだから覚悟しておけ、いいな？」

「あ……………ああ、わかった……………それでどうしたらこの会社は潰れなくて済むんだ？教えてくれ」

「いいだろう、約束だからな。この会社が生き残るための方法とはな、『ISV計画』に参加することだ」

「『ISV計画』・・・？それは一体・・・」

「現在倉持技研しか参加していない国際IS開発計画だ。計画主任を務める織斑夏姫によって今では第三世代にも匹敵する第2・5世代の改修型打鉄がロールアウトしている」

「第2・5世代！？」

「そんなものが開発されていたのか！？」

「ああ、そうだ・・・この計画は彼女が参加を許可した企業のみで構成された計画なんだが先程も言った通り、一社しか参加していない」

「つまり、この会社が参加したら・・・」

「イグニッション・プランに参加せずとも第三世代ISの開発が可能になるな」

ずっと後ろで黙っていた千冬がISを解除して静かに告げる。その姿を見た社長と社員二人は驚きをあらわにする。

「き、君は・・・」

「あ、あなたは・・・」

「『ブリュンヒルデ!?!?!』」

「その名前で呼ぶな、織斑千冬と呼べ」

例の二つ名で呼ばれることを嫌った千冬は右手で前髪を掻き上げながら言った。

「な、なぜ、あなたがここに……………」

「なぜって、デュノアの担任でその計画主任の義姉だからだが何か?」

「え、ちょ、マジですか!?!」

「それに計画主任直々に訪問!?!」

ええい、おのれ千冬姉さん!!ここは『……………さしずめ、火消しの旋風……………プリペンダー・ゲイルと呼んでくれ』という自己紹介をしようと思っていたのに!!

「そんなことしている暇があるか、馬鹿者が」

ゴスッ！！

「殴ったね！？兄さんにも殴られたことないのにつ！！」

「どんだけシスコンなんだお前の実兄は・・・・・・・・」

ブラコンのあなただけには言われたくない。・・・・・・・・ああつ、二度も殴った！！

「それよりもあなたの娘さんですが責任を持って学園で保護させていただきます。計画の内容については夏姫がちゃんと説明しますのでご安心を」

「あ、ああ」

その後、ストライカーシステムについて簡単な講義をした夏姫は見事デュノア社のISV計画参加を実現させ、ついでにシャルロットのISを魔改造することを許可してもらいましたとさ。

「てなわけで、今度君のISを暫く預けてよ!!」

「え!?! あ、うん」

一夏と抱き合って寝ていたシャルロットを起こし、開口一番でそう
言っていました。ぐふふ・・・魔改造してやんよ!!

デュノア社、強襲　　私と契約してISSV計画に参加してよー！ー！　　（後書き）

久しぶりに千の雨の方を更新しようかな・・・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5284s/>

IS～インフィニット・ストラトス～ 空を駆ける天の不死鳥

2011年5月7日15時09分発行